



Tokyo Woman's Christian University

東京女子大学

学会
60
年の歩み



東京女子大学学会

表紙写真について

上：戦争中に迷彩をほどこされた本館（『東京女子大学の80年』所収）

下：現在の本館

東京女子大学

学会60年の歩み

『学会60年の歩み』刊行の辞

学会委員長 油井大三郎

東京女子大学学会は、1950年5月に発足したので、本年5月で60年を迎える。人間の年齢でいえば、まさに「還暦」を迎え、またゼロ歳に戻って、新しい人生を始めることになる。折しも、本学では、昨年4月から文理学部と現代文化学部が統合され、新たに現代教養学部が発足したので、学会も新しい学部の発足に対応して新しいあり方を模索する時期にあるといえるだろう。

新しい一歩を踏み出すにあたって、これまでの「60年」を振り返り、学会活動の成果や問題点を明確にしておくことが重要と考えた。幸い、学会の会長である湊晶子学長を始め、歴代の委員長や委員をつとめられた先輩の先生方から貴重な文章を寄せていただき、充実した「60年史」を刊行できたと感謝している。また、長年、学会の事務局を支えてくださった廣瀬圭さんのご協力で様々な学会活動の記録も収集し、資料面の充実も図ることができた。

私自身は、本合委員長の後を受けて、2008年から2年間、委員長を勤めたに過ぎないが、敗戦の年に生まれたので、学会の歴史が自分の個人史とかなりの部分並行している面があり、学会の歩みを改めて振り返ってみたいと思っていた。

学会発足時の「趣旨」をみると、敗戦の痛切な反省にたって、日本の近代化を達成し、女性の人間復興の実現をめざして、「長年も青年も専門家も学生も、ひとしく謙虚に真理をもとめて再出発すべき」と書かれている。それは、東京女子大学が新制大学として改組された2年後のことであり、学生も教師も参加するというユニークな学会という場を創設することで、新制大学にふさわしい教育や研究を実現しようというあつい思いがこめられていたのだろう。

太平洋戦争中の本学では、白亜の校舎が空襲を避けるため真っ黒く塗りつぶされていたというし、「鬼畜米英」といった狂信的な風潮が圧倒していた時代では、キリスト教精神に基づいて女子の高等教育を目指していた本学はまさに存亡の危機に立たされていた。大学部は廃止され、学生は毎日、勤労働員に駆り立てられて、授業は月に1-2回しかなかったという。そのような暗黒の戦争時代を耐え抜いて、二度と無謀な戦争を繰り返さず、平和的で民主的な日本を創造してゆこうとする使命感が日本全体で高揚していた時代を背景に、この学会も誕生したのだろう。

この初期の熱気をいまに活かすにはどうすればよいのか。時代状況が変化しているだけに、不断の自己革新も必要だろう。大学が希望者全入時代を迎え、学部生の学力低下が嘆かれる一方で、グローバル化が急速に進行し、英語などの外国語で自分の意見をきちんと発信し、様々な分野でリーダーシップを発揮できる広い教養を身につけた人材の養成が切実に必要となっている時代、さらに、少子高齢化社会を迎え、働く女性の存在が極めて重要になっている状況。このような状況にふさわしい大学教育はどうあるべきで、その中で学会はどのような役割を担えばよいのか。そのような巨視的、歴史的な視野から学会活動も位置づけ直す必要があると思う。

そうした中で、近年、学生研究奨励費に応募する学生グループの数が増加傾向にあるのは大変結構なことだと思う。「最優秀」と認定されたグループが4月初めの始業講演の時に新入生全員の前で講演する榮譽にあずかることが励みになっている面もあるのだろう。いずれにせよ、学生自身が自主的にテー

マを選び、仲間を募って、共同研究をする体験は必ずや学生の知的成長に大きな効果を発揮すると確信する。

また、年1回の学術交流会の場では、先生方が専門分野の違いを超えて、教育実践を交流したり、世界や学問の現状認識を交換したりする貴重な機会となっている。まだまだ参加者の数が少ないことは残念であるが、小さくても貴重な芽を今後も大事に育てていっていただきたい。

今回まとめた『学会60年の歩み』がこのような芽を今後育ててゆく上で、何かと示唆してくれるところがあると思う。この冊子が多くの教職員や学生の皆さんの目にとまり、今後の学会活動の発展を支える糧になることを祈っている。

2010年3月

目 次

『学会60年の歩み』刊行の辞	油 井 大三郎	3
----------------------	---------	---

第1部 学会活動の思い出

リベラル・アーツ教育と東京女子大学学会	湊 晶 子	9
学会、創設の頃の思い出	鳥 山 英 雄	11
統計学研究	高 村 多賀子	13
学生研究奨励費による研究の魅力	今 村 楯 夫	15
「ターテッタ」	兼 若 逸 之	17
学会に育てられて	森 一 郎	19
学生奨励研究の思い出	佐 藤 亮 一	21

第2部 2009年度学術交流会 「学会60年の活動とリベラル・アーツ教育」

「学会」について思うこと	大 隅 和 雄	25
大学はどこへ行くのか — 「学校」化する大学の行方	塚 本 三 夫	28
学会活動は面白い	本 合 陽	31

第3部 資 料 篇

学会発足に関する学報記事	37
学会会則・細則	38
学会歴代会長・委員長	40
学会部会編成表	41
始業講演リスト	42
連続講演会リスト	45
その他の講演会等リスト	56
学術交流会リスト	59
学生研究奨励費グループリスト	60
学会関係刊行物リスト	69
学会年表	75

第1部

学会活動の思い出

リベラル・アーツ教育と東京女子大学学会

湊 晶子
(前学長)

東京女子大学は1918年に、教育者・国際人として日本のみならず世界に貢献した新渡戸稲造を初代学長に迎えて創立されて以来、男性と女性の性を超えて「人格」を形成し、民族の差異を超えて「国際人」を育成することを目標に教育が行われてきました。女性だからと手加減することなく、一般の学問を提供し、学生一人ひとりに研究のチャンスを与え、能力を最大限にのばすことを目標に努力が重ねられてきました。

「専門性をもった教養人」の育成を目標に据えた本学のリベラル・アーツ教育を具現化するために、早くから学生と教員が共同参画して研究活動を進める努力が積み重ねられてきました。いま60年を迎える「東京女子大学学会」もその一つです。

私の学生時代と学会

私は1951年に本学に入学しましたので、学会が創立された翌年に入学したことになります。その頃は、第二次世界大戦の廃墟からやっと立ち上がり、急速に学問への情熱が高まってきた時代でした。教員も学生も学ぶことにハングリーでした。入学した年に、現在も続いている始業講演がスタートしましたので、私は第一回の始業講演を聴いた一人です。残念ながら内容は覚えておりませんが、第4代学長齋藤勇先生が講堂で「第一回目の始業講演です」と何度も宣言されたお姿はしっかり覚えています。3年生になりました1953年には学会機関誌『論集』（1950発刊）に加えて、『日本文学』、『英米文学評論』、『史論』がそれぞれの学科から発刊されました。このように先生も学生も探究心に燃えていました。

短期大学部英語科から社会科学科西洋史専攻に編入学した私は、英語にはそれほど苦労しなかったこともあり、岩間徹教授からDavid Springの“Earl Fitzwilliam and the Corn Laws”の論文紹介をするように勧められ、1954年『史論』第2集に旧姓大城の名前で掲載されました。例え未熟であっても学術雑誌に自分の作品が活字になって掲載されるということは、学生だった私にとって大きな励みとなりました。このささやかな経験が私の生涯を決したといっても過言ではないと思います。本学の学会はそのような先生方の情熱に支えられ育てられてきたのです。

学会に期待してきたこと、期待すること

2002年に学長に就任以来、学生と教員が共同参画する本学特有の学内学会こそ、リベラル・アーツ教育の効果的実践の場であると考え大切にしてきました。1973年に設置された学生研究奨励賞をさらに充実させ、学生が教員の助言を得ながら自主的な研究活動を展開し、問題意識を学問的に高めることができるよう応援してまいりました。半世紀以上前の学生時代に、つたない研究成果であっても、在学時代に史論に発表させていただいたあの感動を、現在の学生たちにも味わっていただきたいと思い、

2006年には学生研究優秀グループに、始業講演後発表していただく機会をつくりました。その年は「江戸の町人文化を探る」が選ばれました。学生たちのいきいきとした姿に若き日の思いを重ねて熱心に聴き入りました。

2008年度は大学創立90周年となるので、心をこめて盾をつくり、学生研究奨励賞第一号として、研究発表後表彰し、盾を贈呈しました。その年は「東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎の研究」が選ばれました。2009年度奨励賞第二号として選ばれた「本学卒業生の翻訳家に聞く Colorful Career-Colorful Life」の盾も加えて図書館一階に飾られています。いつの日にか『論集』に、学部生の優秀作品も掲載されるようになればと願っております。

学生奨励研究のこれまでの成果を見てみますと、「女性学・ジェンダー論関係」、「メディア・情報」、「文献・テキスト研究」、「自然科学・数学・コンピュータ」、「教育」、「人文・社会科学」と実に多岐にわたる研究がなされています。学生たちが自ら立てた計画に基づき、自らの責任において研究を進め、自分の専攻を越えて他分野の学問領域にも関心を広げ、複眼的視野をもって自己確立する様は、まさにリベラル・アーツ教育を象徴するものです。私は本学の学会活動は「リベラル・アーツ教育の象徴」だと思っております。

国立大学の法人化に始まって大学を取り巻く環境は急テンポで変化して参りました。大学として変えてはならない建学の精神を大切にしながらも、アンテナを常に張り巡らし、教育界の変化を敏感にキャッチし対応する必要があります。それこそがトップの役割であり使命であることを、各種の学長会議に出席する度に再確認させていただきました。私が学長に就任した頃、本学ではリベラル・アーツという言葉はあまり語られていませんでした。当時の学内外の事情を総合して、「リベラル・アーツ」と「キャリア」で対応しようと方針を立て、GPにも次々挑戦して参りました。

ここ数年に亘って学会でもリベラル・アーツが取り上げられるようになりましたことはこの上なく嬉しく思います。外部からも本学が「リベラル・アーツ女子大学」として認知されて来たことは誠に喜ばしいことです。東京女子大学学会が、時代のニーズに応えつつ、ますます発展して参りますよう心から願っています。（この原稿は学長在任中に執筆されたものです）

学会、創設の頃の思い出

鳥山 英雄

(委員 1950～1961、1982～1985)

私は1949（昭和24）年3月に北海道大学・理学部の植物学科を卒業したが、引き続き研究を続行していた。5月になると、恩師の坂村徹先生と東京女子大学の生物学担当教授、多羅尾四郎氏（北大・理学部。動物学科第1期生）との間で相談がまとまり、私は翌年4月から東京女子大学に就職することになった。

当時、北大の法・文学部は創設されて間もない時期であり、教授の陣容も不備なものであった。これを補うため東大や東北大などから出張される教授達による集中講義が行なわれていた。

東京女子大学の学長、斎藤勇先生が英文学の集中講義においてになることを知った私は6月のある日、法・文学部の講師室に参上した。自己紹介をし「来年の4月には東京女子大学にうかがいます」と申し上げた。先生との初対面の清々しい経験の記憶は今も私の脳裏にある。

1950年4月から本学の生物学研究室において研究を開始したが、その1ヶ月後の5月には東京女子大学学会が発足したのである。駆け出しの生物学徒にすぎない私も設立総会に出席し、年輩及び少壮気鋭の教授達との学問的交流に参加することとなった。総会の議長である斎藤学長の指名により、私は学会の事務担当を命ぜられ、編集委員に加えて頂くことになった。これは若輩の私にはまことに荷の重いことであったが、翌年度からは森敏吉氏（心理学）にも加わって頂き何とか責任を果すことが出来た。その前後の約10年間は評議委員長の岩間徹教授（ロシア史）や柳父徳太郎教授（経済倫理）と偕に学会の草創期における様々な営為に携わることになった。

まず最初に実施されたのは講演会の開催である。私の記憶に残っているのは大森志郎教授（日本文化史）の「米と人口と歴史」と題する講演であった。この講演会を学外にもアピールすべく、大きなポスターをつくり、方々に配り、その1枚を日本橋の丸善の店内にも掲げて頂いた。その効果は靦面であった。1、2週間後の朝日新聞の文化欄には大森教授の「米と人口と歴史」と題するエッセイが登場した。

敗戦後、まだ5年しか経過しておらず、学問・研究の発表の場は疲弊していた。東京女子大学学会は学会機関誌として「論集」を刊行し、人文系・社会系・自然系の論文を収録し、年に2回発行する計画が立てられた。

戦後10数年を過ぎると各々の専門分野の出版事情も変化した。これに伴って1967年に至り、論集18巻以降、第3号・科学部門報告（Science Reports）を発行することになった。これについては考慮すべき問題があった。それは一般的に大学紀要論文の「サーキュレーションの狭さ」と云うことである。つまり、折角、発表しても専門分野の研究者の目に触れ難いと云う問題であった。

これらの件に関して私自身の経験を述べておきたい。私はオリジナル・ペーパー（主として英文）は国内・外の専門誌に発表し、一方、頁数の多い英文綜説をまとめ科学部門報告に掲載するようにした。私は1950年から20年に亘り、オジギソウの運動に関する細胞生理学的研究を展開したが、その成果の一部を綜説^(註1)として、1973年の科学部門報告にのせた。1977年にはソ連の女性生物学者のリユ

ビモア博士（主人のエンゲルハルト博士は筋肉生理学の大家）から彼女の研究グループがまとめた「植物の運動生理」に関する綜説論文（ロシア語）が、私あてに送られてきた。そのなかに私の綜説^(注1)に提示した原図^(注2)が引用されていた（図1）。これは私にとって、うれしい驚きであった。Science Reports of Tokyo Woman's Christian Collegeは、当時のソ連の科学者たちにも認識されていたものと思われる。

私は東京女子大学学会の諸活動が、益々発展し実り多きものである様、願ってやまない。

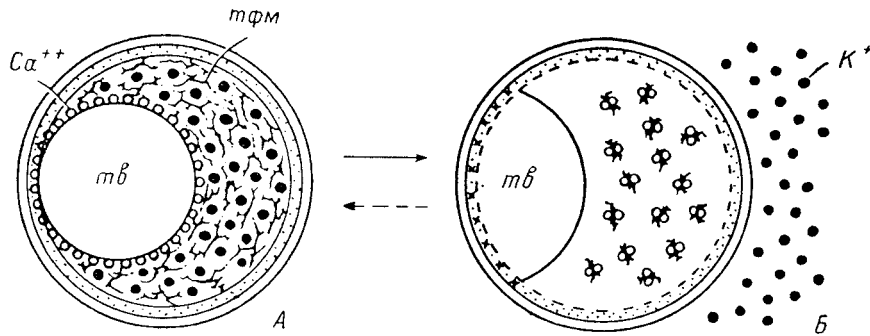


Рис. 46. Схема моторной клетки нижней половины главной подушки мимозы. (По [114]).

А — до сникания, Б — после сникания. *mb* — таниновая вакуоль, Ca^{++} — кальций на мембране таниновой вакуоли, K^+ — калий, *mfm* — тонкофибриллярный материал в центральной вакуоли.

図1（Рис.46）：オジギソウの主葉枕の運動細胞の模式図。左側は運動前、右側は運動後。

(注1) Hideo TORIYAMA : Tannin and tannin vacuole in the motor organ of higher plants. Science Reports of Tokyo Woman's Christian College Nos. 29-31, 1973.

(注2) この原図は20年に及ぶ研究の結論であり、結晶とも言うべきものであった。

統計学研究

高村 多賀子

(委員 1960～1961、1970～1973)

東京女子大学の初代学長は新渡戸稲造先生。学監として迎えられた安井てつ先生は、ご自身も数学がお好きだったようであるが、女子教育に理数系の学科目の習得が必要であることを痛感され、まだ数学専攻の学科が存在していなかった創立の当初から、入学試験に『数学』を課していたことは有名な話である。そして女子に最高の教育を授けたいという教育の理念は受け継がれていった。

『東京女子大学学会』は昭和25年に発足したが、これは新制大学、短期大学の発足などの学制の過渡期に当たって、この潮流の中でごく自然の成り行きのように思われる。当時の『学報』によると、その趣旨は東京女子大学が創立の当初から女子最高学府を目指していたこと、現代社会に指導的貢献すべく、『東京女子大学の学問』の建設に邁進しなければならないこと、そして教職員、学生、同窓生が会員であることなどが記されている。これは世にいう『学会』とは性格が異なり、全くユニークな『学会』というべきであろう。

さて、この度『東京女子大学学会』から送られてきた資料の中の大学全体に亘る膨大な活動報告を一覧して、『統計学研究』の文字に触れ、私はこれこそ数理科、数理学科が誇るべきものとして、創設60周年に当り是非記録に留めたいと思った次第である。

それで、同窓会数専会が編集した『東京女子大学数学専攻学科50年の歩み』(昭和52年)に小河原正巳先生が、『回想20年』と題して書かれたものを参考にしながら『統計学研究』のことを紹介してみたいと思う。

小河原先生は統計学がご専門であり、昭和29年4月、それまで短期大学部の2年制の数理科が3年制に延長されたときに、非常勤講師として赴任された。そして3年生の演習ではゼミナール形式でウィルクスの数理統計学を読ませ、面白そうな問題について論文を書かせ、『統計学研究』(第1号、昭和30年3月)として一冊にまとめ上げ、当時の学科主任の小林薫一先生の序文をいただいて、ガリ版刷りの小冊子ながら『東京女子大学学会』の援助を得て出版され、大学の内外に配布された。

今日、日本の大学の理系の学部の学生の研究論文集が刊行されたという話は全く聞いたことがなく、その点で東京女子大学でこのようなことが成されたということは本当に驚くべきことであり、これはまさに小河原先生の偉大さ、熱心さ、また学生の優秀さ、熱心さを思わずにはいられない。

その後、小河原先生は昭和32年4月に専任の教授となられ、『統計学研究』の発行はずっと続けられた。その間、短期大学部の数理科は終了し、文理学部に数理学科が発展的に開設されたのである。『50年の歩み』から小河原先生の生き生きとした興味深いお言葉をそのまま紹介する。

「もちろん学者の書いた論文とはレベルが違い、厳密さや一般性に欠け、時として八方破れではあるけれども、何かしら新しいものがある、怖いもの知らずの面白さがある。専門学者の中にもこれに興味を持ったり、研究に利用してくれる人々もあって、教育的、応用的には役に立っているようである。

発行部数は初め250部、現在は300部で、国内の主な大学・研究所・国会図書館などのほか、モスク

ワのある研究所、ロンドンの市立図書館、ソウルの図書館からも交換あるいは寄贈を申し込まれ数年前から送っている。」以上は本当に驚嘆すべき内容である。また、ソ連では当時このような外国の論文類はどんどんロシア語に翻訳されていたと聞いている。

この『統計学研究』は、小河原先生が定年退職された昭和53年3月第24号まで実に24年間続けられたのである。

安井先生が理数系の学科目を尊重し、培われたアカデミックな土壌の中で育まれた優秀な学生達が、小河原先生のご熱心なご指導によく応えて『統計学研究』という価値ある成果を挙げたことは、実に象徴的な、誇るべきことであり、年を経るに従ってその重みを増して胸に迫ってくるものがある。またこれを支え育てて下さった『東京女子大学学会』に心からの感謝を申し上げる次第である。『東京女子大学学会』の更なる発展を念願して止まない。

学生研究奨励費による研究の魅力

今村 楯 夫

(委員長 1992～1995 委員 1990～1991)

大学に在籍する学生を会員とする「学会」の存在は稀有だろう。私はこの稀なる存在の「東京女子大学学会」を知ったときに、とても感動したことをいまなお鮮明に覚えている。学制改革に伴い新制大学として一步を踏み出した1950年に創設された学会は大学の歩みとともにあり、すでに60年の歳月を刻んできた。一般に学会が研究者の集団組織であるのに対して、本学に所属する学生、教職員、卒業生の有志など広汎なメンバーによって構成される本学の学会において、特に学生研究奨励費を交付し、学生会員のグループ研究を援助してきたことはすばらしいことである。

私は常務委員を1990年度から91年度まで務め、92年から95年度の4年間、委員長を務めた。この間に実施された学生研究奨励費を受けたグループ活動で深く記憶に刻まれている研究がいくつかある。そのひとつに「熱帯雨林破壊と私たちの生活」(1990年度)がある。

この研究は日本の膨大な木材輸入量の一端となっている「使い捨て割箸」についてのもので、当時、本学の学生食堂で使われていた割箸のルーツを探りつつ、割箸とプラスチック製の箸のそれぞれのメリットとデメリットを調査・吟味した研究であった。食堂の割箸のルーツが中国、インドネシア、フィリピンなどにあり、それが森林破壊とどう関わっているかを探る中で、熱帯林の消滅の原因が複雑に交錯し、単純に割箸にその原因を負わせることができないことが次第に明らかになる一方で、プラスチック製の箸の洗浄に要する水とエネルギーの消耗などの問題が浮上し、本研究は最終的に割箸否定論に疑念を發した形で「リサイクル」が内包する問題を新たな課題として提示した。

ひとつの仮説をもとに研究を始め、その結果、仮説そのものを誤認とする、あるいは仮説に疑義を呈するということは実に勇気のいることであり、また柔軟な発想なくして困難なことである。この割箸研究が深く記憶にとどまり続けているのは、まず学生たちが地球温暖化や酸性雨を杞憂し、地球環境保護に深い関心を抱いて研究を始めたことに対する視野の大きさにあったが、それ以上にこの柔軟性に潜むしなやかさであったように思う。

この年、もうひとつ「静岡県引佐郡三ヶ日町平山における民俗調査とその民俗誌作成」が印象的であった。村落組織、家族・親族、生業、衣食住、人生儀礼、信仰伝承、年中行事、口承伝承と多岐にわたり、総戸数150に満たない集落を対象にフィールドワークによって調査研究したものである。遠く源平の争乱を経て、落武者が逃れ住んだという末裔が司る祭祀など伝承文化をまとめ、調査報告書「平山の民俗」は助言者の松沢哲成氏の丁寧な指導もあったであろうが、学生研究としては実に堅実でレベルの高いものであった。

学会常任委員の初年度ということもあったかもしれないが、私は学生研究奨励費を受けた学生たちの真摯な研究ぶりに大いなる感動を覚えた。その後、私自身、何度かこの奨励研究に携わることを学生に勧め、私自身、いっしょに学んできた。惜しむらくは、これらのすばらしい研究の成果発表会の参加者が極めて少ない点である。学内外にさまざまな行事や活動がある現在、学会発表会に目を向けさせ、足

を運ばせるように学生を引きつける方策を新たに提案することは困難である。しかし、これだけメディアが多様化している現在、大学のホームページや広報を通じて、より多くの人びとに学会の存在を認識させ、活動を広く知らしめる工夫をしてみるのがいいだろう。

学会の委員長時代にはいくつか記憶に鮮明に焼き付いていることがある。ひとつは学会事務室のことだ。4号館4階のエレベーターを降りた正面にあった事務室兼会議室には東に大きな窓が広がり、その窓から本館の背後に広がる鬱蒼とした林を一望のもとに見渡せた。3号館の研究室と較べると部屋もきれいで広々としており、訪ねるのが楽しみであった。その事務室で事務を長く担当されていた廣瀬圭さんは生きる事典のごとく学会の歴史を知り、問題点の所在を的確に判断し、その有形無形の仕事ぶりにいつも賛嘆し、心強い思いをいただいた。そんな中であって、4号館から本館に事務室を移動する指示が出され、多大なバックナンバーの在庫をかかえていた学会としては不本意であったが、やむなく移動することになった。本館1階の西側にある現在の学会事務室がその移転先であった。部屋は暗く、風景もかつての雄大さは失われた。心なしか廣瀬さんにかすかな焦燥感が見られるように思われたのは私の妄想だったのだろうか。その廣瀬さんも定年を迎えられ、昨年、惜しまれつつ退職され、東京女子大学からひとりの有能な人材が失われた。

もうひとつ鮮明な記憶は学会の助成金をもとに出版される研究書をめぐり、不採用の判定に異議が出されたことがあり、苦渋のときを過ごした。委員長は名ばかりの審査員ではあったが、委員長の裁量と判断に対して厳しい追及があり、合否判定の内容を公開すべしという要求が出された。最後まで私はその審査内容を公開することを審査委員に求めることはしなかったが、いまなお、そのときの判断は正しかったと思う。

その後もすぐれた研究書が学会の助成金を得て、出版され、学内外からそれらの研究書に高い評価をえていることはうれしい。学生の研究も教職員の研究もそれぞれ学会の支えによって活性化されていることをひとりの学会員として誇りに思う。

「ターテッタ」

兼 若 逸 之

(委員長 1998～2000 委員 1997、2001、2005)

東京女子大学学会は、今年創立60周年を迎えた。私が学会の委員長をしていた折が50周年であったので、それからもう10年が経っている。50周年記念講演では韓国から元統一部長官の康仁徳（カン・インドク）先生をお招きし、生の南北関係の話聞くことができた。統一問題は抽象論で語られることが多く、また、話せない微妙な問題も少なくない。そのような中で、統一問題における韓国の姿勢について、明確な基本原則をもとに具体的な説明を伺えたのは幸いであった。

康仁徳先生と待ちあわせたのは比較的新しい建物の喫茶店であったが、その一帯は有名な飲食店やギャラリーが多く、そうした装いが街のファッションでもあった。青瓦台に近く、かつて大統領が秘密の会合の場として使った「安家（アング）」を思わせる家屋もある。店内で画廊のポスターを見ながら待っていると、ほどなく先生がいらした。元来気さくな方で、できることはできる、できないことはできないとはっきりしている。大病をされたと聞いていたが、とても元気そうであった。打ち合わせにはそれほど時間はかからなかったが、講演を日本語でして下さると聞いて、少し驚いた感覚が今も残っている。帰り道、近くの画廊を覗くことにした。

その画廊は韓国の服装デザイナーとして有名なA・Kの店がかつてあった通りに面している。A・K店の隣のビルはフランス文化院で、1970年代にはここでよく映画会が催された。モノクロの「Hiroshima mon Amour」を見たのもここである。あとで知ったのだが、日本語のタイトルでは「広島」という地名がない。「広島」とフランス中部の町の「ヌベール」がセットになって一つの映画になっているのに、広島がなくなると「ヌベール」もなくなってしまふ。「ヌベール」がなくなると、「聖女ベルナデッタ」も、そして人としての傷や痛みからの「治癒」も消えてしまふ。万病を治すともいわれる「ルルドの泉」をマリアのお告げで見つけた「ベルナデッタ」の遺体が、この「ヌベール」の聖堂に存命中の姿のまま眠っているからである。ちなみに、日本語のタイトルは「二十四時間の情事」となっている。モノクロといえば、A・K自身は白が好きで、音楽会などで何度か会ったことがあるが、いつも白だけを着ていた。こんなことをあれこれ思いながら、画廊に着いた。

画廊の入り口は通りから階段を五段ほど上る。人はまばらで、絵の方が数が多い。ひとりの作家の連作と思われるものが並んでいて、また別の作家の連作が次のコーナーで並ぶ。ひとつだけではよく分からないのだが、こうして連作をみせてくれることで、作品が語りはじめる。これらの作家は初めから抽象画を描いていたわけではないであろう。しかし、一度抽象へ進むと、なかなか具象に戻ることはない。「ノン・リターンブリッジ」なのかもしれない。

二十年近い韓国生活を終えて、日本に帰国する直前に、知人の画家宅に呼ばれたことがある。めったに人を画室に入れないが、その日はなぜか画室に案内された。絵の具の匂いと描きかけたキャンバスやすでに完成した絵などが乱雑に置かれていた。ふたをした小皿だけが順序良く並べてあった。「これ？」と指で指すと、満足そうに頷きながらも、すばやくその後ろの完成したキャンバスを一つ取り上げた。

彼も抽象へと画風をかえた一人である。

韓国の慶尚北道に奉化（ボンファ）というところがあり、その農村が舞台となった映画が300万人の韓国民を涙させた。日本でも最近上映され、話題となった。日本語の題名は「牛の鈴音」で原語の意味とほぼ同じ、英語では「Old Partner」。年老いた牛と、その牛を働かせるおじいさんの日々を淡々と描いたドキュメンタリー作品である。途中、畑を耕す牛におじいさんが働かされているのではないかという気がするようにも作っている。それは、長年連れ添ったおばあさんがいわば合いの手を入れるといった感じで、おじいさんに愚痴をこぼすからかもしれない。

東京女子大学学会創立10周年にあたる1960年に新藤兼人が「裸の島」を作っている。こちらは台詞のないフィクションである。「牛の鈴音」はノンフィクションで、多くはないが台詞がある。日日の生活を撮りつつ、「老い」という世界を抽象画のごとく描いているのである。こうしてみると、具象から抽象への道のりはそれほど遠くないのかもしれない。

学会創立の年の1950年に朝鮮戦争が始まった。今は休戦状態にある。「牛の鈴音」の一シーン、ラジオの音がでなくなり、おばあさんが「叩いてみたら」という。叩いてみるが直らない。ここでおばあさんが「ターテッタ」という。「ターテッタ」とは「できた、なった、完了した、終わった」、あるいはその直前の状態をいう。ラジオも牛もおじいさんもみな「完了した」、つまり「年やなー、もうあかんわ」といっているのである。

朝鮮戦争とその後の南北分断は当初、具象のはずであった。いつの間にか冷戦構造が定着し、抽象へと「昇華」したが、それさえ今は意義がなくなった。その結果、「ターテッタ」という状況になったのである。康仁徳先生のいう原則とはこの「ターテッタ」的状況を踏まえたものであったように思う。

東京女子大学学会はこれからである。60年経つと、その干支に戻る。つまり還暦である。やっと一回りした。またあらたな一回りへと、向かってほしい。学問や研究には「ターテッタ」ということはないのである。

学会に育てられて

森 一 郎

(委員長 2001～2002 委員 1998～2000、2004～2005)

本学学会の特徴は、まず、通常会員である教員が専門領域を超えて集まっていること、それに加えて、ほとんどの在校生が学生会員として加入していることにある。学会の財政も、主に、学生会員の会費から成り立っている。それゆえ、出資者に還元するためにも、学生の学びのための支援を行なうことが、本学会の使命の一つとなっている。だが、私は、生まれつきわがままな人間だからか、自分自身の学びのための支援を学会に仰いできたという思いのほうが、はるかに強い。そこで、自分がこれまで学会から受けてきた数々の恩恵について、以下、覚え書のようなものを記させていただく。

本学紀要『論集』には、1995年春以来、文字通りの拙稿を掲載させてもらっており、いつしか27本を数える。査読制度を強化しようという動きもあるようだが、私のようなヒマ人が拙文を寄せるには、題目を届け出しておくだけで自由に投稿できる従来のシステムのほうが有難い。そのつどの問題関心を紀要論文として公表できる機会を与えられていることは、教員にとって大いなる利得であろう。(なお、『論集』の編集は、学会常務委員会に任せられているが、刊行自体は大学の予算で賄われ、学会のお金は使われていない。「出資者たる学生に投稿してもらわなくては」といった議論は、誤った想定に基づく。)

学会ニュースの「学界紹介」のコラムに、私は赴任した翌年、「哲学の終焉について」と題する小文を寄せた(1994年12月)。それを目に留めた当時の山本信学長に、「あれはよかった」と言われて嬉しかったのをよく覚えている。そういえば、『論集』に最初に寄せた拙論「ニーチェから見たハイデガー」を、「面白い視点だね」と評してもらえたことも、よき思い出の一つである。(山本先生からは、学生の頃飲み会の席で「君はお酌の仕方がうまい」と言われたのと合わせて、ついに3回しか褒めていただけなかったのだが。)

1995年秋、哲学部会主催の講演会に、渡邊二郎氏をお迎えし、「美と幸福について」と題する講演をしてもらった。碩学の格調高い講演に、一同聴き惚れた。恩師を呼んで、学生とともに話を伺う機会がもてたこと自体、有難いことであった。「哲学者にとって幸福とは、哲学しかないのでは？」と質問して「君はいつもそういうことを言う」とあしらわれたことも、慰労の席で愉しく語ったことも、懐かしく思い返す。一昨年惜しくも物故された哲学者は、膨大な著述を遺し、それを目下、全12巻の著作集として刊行準備中である。その第10巻に、かの学会講演会の原稿も収録される予定である。

学会常務委員を何年か務めたあと、当時の兼若逸之委員長に拝み倒されて、若輩者ながら委員長を引き受けたのが、2001年。2年目の任期を終える間際、2003年度研究休暇を取得して辞めるまで、たいしたことはできなかった。佐藤亮一先生を拝み倒して次期委員長を引き受けてもらったことくらいだろう。たった一つ、「学術交流会」という教員同士の研究交流の機会を、新しく始めたことが挙げられるが、これなどは、学会の雑務を増やしただけではないかと恐れる。それでも、当時の常務委員の方々の賛同を得て、学問分野を跨いで自由に意見交換する場を開くことができたのは、喜ばしい経験であっ

た。とくに斎藤康代先生には温かい支援をいただき、その後も親交が続いている。

学会にお世話になったといえば、2007年度のモノグラフ刊行助成を受けて、拙著『死と誕生』の刊行に漕ぎつけられたことを、忘れるわけにはいかない。助成費自体は、こちらも学会からではなく大学から出ているが、『論集』に載せた拙論も数篇盛り込み嵩のふくらんだ草稿が、刊行助成の対象となり日の目を見ることができたのは、やはり学会のおかげである。とりわけ廣瀬圭さんには、『論集』寄稿のたびにお世話になり、委員長時代は絶大なバックアップを賜わり、モノグラフ刊行が遅れたときも寛大に見守っていただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。委員長は頼りなくても、廣瀬さんが長年にわたって事務全般を掌握してこられたからこそ、今日の学会がある、と言っても過言ではない。

最後に、学生研究奨励費について一言。学生による本学レーモンド建築群なかんづく旧体育館の研究は、2007年度からねばり強く続けられている。それを育てたのは、まさしく学会である。私自身、初代の田代桃子さんのグループの研究発表に接して、目から鱗の経験をした一人である。古い校舎に奥深く守蔵されていた建学の精神が、そこに復活を遂げた観さえあった。その意味では、2008年から09年にかけて学内で盛り上がった旧体解体再考運動そのものが、学会に育てられたと言える。学生と教員がともに属する本学学会ならではのユニークな知的交流が、模範的な仕方で繰り広げられたのである。

廣瀬さんが退職されて少しして、旧体は取り壊されてしまった。キャンパスは一時、守り主を失ってしまったかのようなようだった。その一方で、学会事務室は小山裕子さんに引き継がれ、油井大三郎委員長のもと、学会はますます活発に活動を続けている。「一粒の麦」のたとえのように、死してはじめて豊かに実を結ぶものが、この世にはある。レーモンド建築の校舎の研究は、これからもしぶとく続けられるであろう。ちなみに、「美と幸福について」の講演原稿が採録される渡邊二郎著作集も、この秋には筑摩書房から刊行が始まる。

(2010年2月12日、恩師の三周忌の日に記す。)

学生奨励研究の思い出

佐藤 亮一

(委員長 2003～2004 委員 2005)

私が東京女子大学学会の存在を意識したのは、赴任して2年目のことだった。それまでも総会には出席し、大学に学会という組織があることは知っていたはずであるが、さほどの関心はもっていなかった。

私は東京女子大学赴任以来、毎年ゼミの学生を山形県の三川町という小さな町に連れて行き、方言調査をさせていた。そのゼミの学生が学生奨励研究に応募して調査結果の一部を発表したいと言ってきたのである。当時、そのような制度があることを私は知らなかったが、学生が大変熱心に応募を希望したので、もちろん賛成し、助言者として推薦文も書いたように思う。

しかし、学生奨励研究は授業とは別に学生が自発的に研究するものであって、ゼミの授業の内容を発表することは認められないということを私は認識していなかった。常務委員からそのことを指摘されて学生は落胆したが、ゼミで行った研究とは分析の観点が異なると強弁して、なんとか採択してもらった。

その後は学生奨励研究発表会に出席することはほとんどなく、学会への関心も薄らいでいた。ところが定年退職数年前の2003年初頭(?)に学会委員長の森一郎先生から、次期の学会委員長になることを強く要請され、常務委員の経験もなく、学会に関心が薄かった私は困惑した。しかし、私はこの種の依頼を強く断るのが苦手で(同じ理由で組合委員長もさせられてしまった)、森先生に事務的なことは学会担当の廣瀬さんが万端してくださるので心配無用と言われ、説得させられてしまった。

委員長として常務委員会に出席し、奨励研究の審査にも関わることになったが、最初に疑問に思ったのは、フィールドワークとして地方に出かけて調査する研究であっても、旅費としての支出は認めないという学会の規程であった。そのころ、「奈良県御所市名柄における民俗調査」という私にとって興味深い研究の応募があり、学生数名が調査を行っていたが、旅費はすべて自弁ということだった。しかも、奨励研究費の上限は8万円であり、そのような少額ではチームを組んでのフィールド調査はまず不可能である。そこで私が提案して常務委員会で議論し、「原則として上限は8万円、ただし内容、人数などにより15万円まで増額することがある」という規程の改定を行い、合宿費・旅費の支出も認めることにした。

委員長として奨励研究成果発表会の司会を担当することになったが、そこで驚いたのは出席者があまりにも少ないことだった。学生は発表者が大部分で、教員も助言者以外はほとんどいなかった。しかも、自分のチームの発表が終わるとさっさと帰ってしまう学生や教員(助言者)も少なくなかった。この状況は私の在職中は続いていたが、今は改善されているのだろうか。

奨励研究は学生の自発的研究であって、ゼミの授業とは無関係であるべきだというのが立て前ではあるが、実際にはゼミの教員が助言者で、研究内容もゼミの授業と関係があるものが多いように思う。この点で私が感心したのは「扇面を構成する木版の整理と考察」という研究である。このグループ(扇研究会)は学科も学年も異なるさまざまな学生が長期的に研究作業を続け、興味深い成果をあげている。

その努力と成果には、研究報告会に出席した教員から期待と賛辞が寄せられた。このような学際的な研究こそ学会の理想とすべきものであると思う。

2004年度に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に応募したが、書類審査は通ったものの採択に至らなかった。その最大の理由は「学生の参加が少ない」ということであったと思う。常務委員会ではその反省として学会改革に関する議論を行ったが、その結論の一つは、奨励研究の中の最優秀チームに始業講演の折に発表してもらおうというものであった。これは私の定年退職後の2006年度から実施されている。その成果が学会への学生の認識の変化となってあらわれていれば幸いである。

学生奨励研究の成果は学会ニュースにその要旨が掲載されている。しかし、その分量はそれほど多くなく、中途半端な面があると思う。要旨とは別に4～6ページ程度の詳しい研究成果報告書を提出してもらい、数年おきに冊子として刊行してはどうだろうか。また、奨励研究発表会を学外の住民にも公開すれば、東京女子大学への地域住民の関心が一層高まるように思う。

東京女子大学学会の最大の特色は教員と学生の共同参加の組織であることに違いない。その特色をさらに生かす道への模索をこれからも続けてほしい。

第2部

———— 2009年度学術交流会（2010年1月19日） ————

「学会60年の活動とリベラル・アーツ教育」

「学会」について思うこと

大 隅 和 雄

(委員長 1984～1987 委員 1980～1983)

1 学会の思い出

私は1977年の春に、札幌から東京に移り、東京女子大学に勤めることになった。40代半ばだった私は、前任校での経験もあろうし、役に立ちそうだと思われて、新しい職場にまだ馴れないうちに、学生部の委員を仰せつかり、ついで比較文化研究所の運営委員会に加わり、1980年から、学会の委員もということになってしまった。

当時、学会の委員長は、静間良次先生だった。静間先生は、位相幾何学を専門にしておられたが、哲学、とくにフランスの思想史にくわしく、音楽についても造詣が深かった。といっても、委員会では、ご自分のことはあまり話されず、皆の意見によく耳を傾け、穏やかに議事を進められた。学会主催の講演会で、いつも一番後ろの席について、静かに耳を傾けておられたのを思い出す。

先生は、旧制七年制の、甲南高校の卒業生で、その自由で豊かな校風をこよなく愛しておられた。そして時折、東京女子大学の校風が、甲南高校のそれに似ていると感じることがあり、それでこの大学に勤めているのだといわれた。先生のいわれる甲南高校の校風というのは、リベラルアーツを基本とする教育の上に成り立っていた学生生活のことで、国家の指導者となることを目指して、天下国家を論じ、高歌放吟する国立の高等学校の気風からは遠い、関西の私立高等学校の校風だった。

およそ真なることを求め続ける人を育てようという、東京女子大学の建学の精神の中に流れているものを、先生は、甲南高校の校風の中のよきものと、重ねて合わせて考えておられたように思われる。そういうことを、論じ立てるような先生ではなかったが、学会は、先生のそういう思いを、具体的な何かにしてゆくことにつながっていたように思う。

1984年になって、先生は、長年続けた委員長を、交替すべき時期になったので、私にあとを引き受けるようにいわれた。私は、先生の後を受け継ぐ力があるとは思えなかったが、先生の勧めに従った。

その頃、学会が抱えていた問題はいくつもあったが、一番大きな問題は、学会の運営費用をいかにして確保するかという問題だった。学会は、教員と学生が納める会費で成り立っているもので、学生の学会加入率が下がれば、活動の計画を縮小しなければならない。大学の研究紀要にあたる『論集』の編集刊行、文理学部、短期大学の10学科の研究活動費の支援、講演会、講座の開催などが、学会の仕事なのだが、なんとしても活動の規模縮小は避けなければならない。

学生の学会加入の低下は、すでに私が委員になった頃に始まっていて、学生が大学に納める校費の中に、学会費を入れることはできないかという意見も出されていた。静間先生は、それに対して、学会が自主的な活動を持続するためには、学生は任意加入とするということ、変えてはならないという意見で、学会の学生に対する活動を進めて、学生の会費を還元するようにしたいといわれ、私もそれに賛成だった。

年に1度、教授会の議事が終わったところで、学会の総会に切り替え、学会の活動と会計の報告をし、次年度の計画案の検討が行われる。私は、学会の活動を持続するために、学生会員の増加が必要なの

で、一年生の組主任と、学科主任に、学生の学会についての理解を求め、学会に加入するよう呼びかけてほしいとお願いした。校費の中に学会費の項目をいれるのがいいという意見も少なくなかったが、総会の結論は学生の学会に対する理解を求めて、様子を見ようということになった。

学生への呼びかけが功を奏し、学会が、学生の自主的な研究グループに研究費を出すなど、いくつかの工夫を重ねたこともあって、学生の加入率は徐々に回復し、委員は安堵して、計画を進めることができるようになった。

もう一つ、年来の懸案になっていたのは、学会が積み立てていたモノグラフ刊行費の活用だった。発足の頃、学会は、教員の研究成果を、モノグラフとして刊行したが、学術書出版の事情がよくなって、学会による刊行は喫緊のことではなくなっていた。モノグラフ刊行費で、一般教育のテキストを、新書版のシリーズにして出す案も、教授会に出されたが、実現しなかった。いろいろ協議を続けた末、東京女子大学学術叢書の形で、大学の補助により各出版社から刊行される研究書の刊行助成をする案がまとまり、塚本委員長によって実現することになった。

2 新制東京女子大学と学会

ところで、学会は、新制大学として発足した東京女子大学を、大学として充実させて行くために創られた会だったのだと思う。学会の歩みは、新制大学の歩みと重なっていた。

東京女子大学は、1948年に、新しく制定された「学校教育法」の新制大学として認可され、文学部に、哲学科、国文学科、英文学科の3学科を置く、4年制大学の開校式が行われた。その年は、創立30周年に当たっており、大学の発展を祈って、記念行事が挙行され、7月に、齋藤勇学長が迎えられた。1950年には、文学部に、社会科学科が増設され、英語科、国語科、数理科、体育科の4学科からなる、短期大学部が発足した。

極めて小規模の大学ながら、多様な内容と由来を持つ、文学部と短大の8学科をまとめて、学問と教育の場である大学を創って行くために、学長はさまざまに心を砕いたが、学科を問わず、教員と学生のすべてが参加して、学問を深め、文化を語り合う場を開こうとして設けられたのが学会だった。

私は、敗戦の年に旧制中学校に入学し、4年生になると思っていた1948年に、学制改革が行われて、旧制中学校に併置された新制中学校の卒業ということになり、旧制中学校が看板を掛け替えた、新制高等学校の1年生になり、高校を卒業して、新制大学に入学した。

新制大学には、教養課程が置かれていたが、私が入った大学の入学式では、矢内原忠雄教養学部長が、教養の意味を説き、専門の独善を排除できなかつた旧制大学を批判した。新制高校の、開放的で自由な空気を楽しみはしたが、満たされないものを感じ続けていた私は、新制大学の教養課程に期待したが、矢内原先生の理念は、発足間もないのに崩れはじめていた。教養2年、学部2年は、新制3回生の私の時には、3年生の旧制大学の教育を維持するという、学部で圧されて、1.5年と2.5年になり、教養課程のカリキュラムは、虫食いの不完全なものになっていった。新制の大学では、教養課程も専門課程も、両方とも中途半端で、皆が不完全燃焼の感じを抱いていたようにおもう。

脇道に入ってしまったが、東京女子大学は、教養課程の教育の実現に努力し、成果を上げた数少ない大学の一つだったと思うが、新制大学の理念を実現する道は、平坦ではなかつた。社会科学科が、史学科と社会学科になり、心理学科の増設、短大の数学科が3年制になったあと、文理學部の数理学科になるというように、東京女子大学が発展し、短期大学部も歴史を重ねるにつれて、大学は、それぞれに拡充を目指す学科の集合体となって、専門教育への傾斜が始まり、学科を問わず、教員も学生もともに集

い、学問について語り合うという、齋藤学長の学会にかけた夢は遠のいていった。

学生も、学科、ゼミへの帰属意識がつよくなって、東京女子大の学生としての思いは希薄になっていった。学生の学会加入率の低下は、学科の拡充と一般教育の形骸化の表れだったに違いなく、1948年に新制大学として出発し、「専門学校令」による東京女子大学を廃止して以来、この大学が辿ってきた道と、重なっていた。

3 学会への期待

私が、東京女子大学に採用された時、文理学長の伊藤善市先生は初対面の私に大きな声で、「東京女子大を愛してください。この大学をいい大学にして行くために、一緒に頑張りましょう」といわれた。私は、学部長の大仰なことばに、たじろぐ思いがしたことを憶えているが、あとになって、いかにも伊藤先生らしい挨拶だとなつかしく思うようになった。

伊藤先生は、東京女子大学が新制大学になって、社会科学科が新設された時に、東京女子大学に来られた。何人もいた新任の人たちが、この大学をいい大学にするために、力を出し合い、大学としての東京女子大を創ってきたという思い出を聞いたが、伊藤先生もその一人だった、伊藤先生は、直接学会に関わることはなかったが、新しい大学を創って行こうという、当時の熱気の中で学会が成り立っていたと思われる。

私は、委員長の時、牟礼に出かけて、学会の牟礼部会の総会で、報告をしたが、牟礼の会は、一つにまとまった会という感じで、学科ごとに分かれている善福寺の会とは違う雰囲気を感じた。牟礼に現代文化学部が誕生し、牟礼から善福寺に移り、去年の春からは、二つの学部が一つになって、現代教養学部になった。

新制大学が発足した時に、リベラルアーツの具体化を担って、学会が創られ、新しい大学を創るために集まってきた人たちが、協力し合ったように、今、東京女子大学では、新しい学部を創って行くためのさまざまな試みが始められ、努力が重ねられているであろうが、学会がその中で、果たす役割は、小さなものではない。

60年前に始まり、不完全なままに終わった教養教育、一般教育を、見直して新しい基礎教育とその具体化を考えることは、新学部を創って行く上で欠かせないことと思うし、細分化の結果、全体が見えなくなっている、学問の現状の打開のために、学科を超えた問題を提起する場に、自主的で自由な立場にある学会がなることを願っている。

大学はどこへ行くのか ― 「学校」化する大学の行方

塚本三夫

(委員長 1988～1991 委員 1984～1987)

『大学』はなくなっているのも同然」というショッキングな見方をする人がある（国際日本文化研究センター所長猪木武徳『大学の反省』、NTT 出版）。しかしそこまでではないにしても、「大学はいつからこんなに忙しく、ザワザワしたところになったのか」という思いをもつ大学教員は決して少なくないのではなかろうか。

周知のように、とりわけここ10年ほどの間、大学はやれ「トップ30」だ、やれ「COE プログラム」だ、「GP」だなど、文部科学省が矢継ぎ早に出してくる各種の、敢えて言えば「誘導的」政策への対応に追いかけられ、とりわけ私学にあっては、大学「全入時代」を背景にした生き残りをかけての激しい競争の波に飲み込まれてきた。学生の確保をにらんだ大学・学部の新設、組織の改編や機構のリストラクチャリングに無関心であり得た大学は、おそらく皆無であろう。多様な入試形態を導入して受験生を一人でも多く取り込もうとする工夫もまた、そうした動きの一環に他ならない。

私の勤務先である大学には、比較的加入率（組織率）の高い教員組合がある。組合は、毎年「春闘」要求作りのためにアンケート調査を行っている。その中で、近年特に目立つのは、「忙しくなった」という回答が年々増えていること、忙しくなった要因として、「本来の研究・教育以外の仕事」量が増えたという回答が顕著になってきていることである。日本の大学全体でどうなっているのか、正確なデータは持ち合わせていないが、おそらくほとんどすべての大学において、教員の本来業務であるはずの研究・教育以外のこうした業務、仕事が一頃と比べて格段に増えてきている実態があるのではないかと推測できる。総じて、今や大学はかつてのように、比較的自由裁量時間が多い「仕事場」ではなくなってきているのは確かだと思う。

もちろん、いわゆる「体力」のある大学は、拡大路線によってこの競争時代を生き抜く道を選択することも出来る。しかし、多くの大学は、限られた資源の中で、一方ではカリキュラムの整備や学生サービスの充実に多大なコストとエネルギーをかけ、他方では、したがって可能な限りで「余裕資源の絞り出し」とスリム化、とくに私大では経常経費の圧倒的部分を占める人件費の相対的削減、すなわち人的なスリム化に取り組みざるを得ない状況に追い込まれている。こうした状況は、例えばPD 問題（またはOD 問題）に象徴されるように、教員の増員がなかなかかなわないため、大学への就職が困難になって滞留している若手研究者の状況を深刻にし、教員系列の助手身分の廃止という制度変更を契機に、今や多くの大学ではかつての助手さえいなくなった。

繰り返しになるが、大学教員は今、「自己点検・自己評価」などのための膨大な書類作り、私大助成の評価項目とされている様々な「授業改善」等諸々の学生サービスへの取り組み、FD を推進するための作業など、数え上げたらきりがなくらいの仕事に忙殺されている。私は、必ずしもこれらの仕事すべてを頭から全面否定するつもりはないし、それらすべてに意味がないと思っているわけではない。それに、教員個々が仮にやりたくないからといって、しないですませるものでもないと思う。なぜなら、

我々教員は、いってみれば自営業者ではなく、契約上、法人（理事会）との雇用関係のもとに仕事をしている被雇用者なのだから、組織としての大学が正統に機関決定したことがら、及びそれに伴って必要とされる業務を、それが教員の総意に反するものであれば別条、特段の理由がない限り、退職でもしない限り、自分勝手に拒否することは出来ないと思うからだ。教員のリアルな立ち位置とはそういうものだろう。ただ、それにしても多くの大学がこれまでせき立てられるかのように行ってきた、そして今も続いているそうした取り組みが本当に大学を良くすることになるのかどうか、ここらで足を止めて考えてみることも必要ではないかと私は思う。大学以外の世界を知らないまま、長年教員として生活し、今年で70歳を迎えようとしている私は、大学はいつから、どうしてこうなったのか、いつから大学が「学校」みたいになったのか、そしてこれからどうなるのかということの時々考えるようになっていく。

こうした大学をめぐる現状について、特に私が気になっていることを2点だけ挙げてみたい。

ひとつは、上に触れたような政策誘導的ともいえる文科行政の示す方向に乗り遅れまいと、多くの大学がさながら「レミング現象」を見るごとく進めてきた「改革・改善」が大学をどのように変えてきているのか、換言すれば大学の質的向上にどれほど寄与しているのかという点である。確かに、各大学は「特色ある教育」を掲げて、様々に「斬新」な取り組みをしている。以前には考えられなかったような目新しい大学、学部等が続々と誕生し、百花繚乱の趣さえある。しかしながら、失礼な言い方になるのを承知でいえば、果たしてそれらの取り組みがどれほどに内発的なものであり、言葉の真の意味での大学自身の「自己決定」あるいは「自律的決定」として行われてきたと言えるだろうか。実際には、それらの取り組みの背後にあって、しかし強力な導引となっているのは、91年の「大学設置基準の大綱化」以降、明らかに、そして系統的に進められてきた文科省の大学政策、すなわち「選択」と「集中」を柱とした競争原理ではないだろうか。もしそうだとすれば、表層的に一見どんなに多彩、多様に見えても、そうした取り組みは結局競争の中で大学総体を薄っぺらにし平準化することにしかならないのではないかという気がする。数値化され、フォーマット化された基準による大学「評価」や、補助金の「選択的」算定方式に添った形で取り込まれる「改革・改善」、そしてそれに大学が「水路付け」されて行われる取り組みは、大学の真の意味での多様化というよりも、不可避的に大学の個性を剥奪し、長いスパンで見ればむしろ大学を確実に平準化させていくことになると思う。大学、とりわけ私学の個性がますます失われるだけでなく、大学の存在意義そのものが問われる事態が到来しつつあると言って過言ではない。（こうした事態についての問題提起的な仕事の一つとして上垣豊『市場化する大学と教養教育の危機』、洛北出版がある）。

近年、「大学＝サービス産業」という言い方が何のためらいもなく使われるようになった。大学、そして教員においても、「学生サービス」という言葉はいつの間にかプラス言葉となったように思う。私は、このことに強い違和感を感じている。それは、学生をもっぱら「サービス」の対象・客体ととらえ、学生の即自的なニーズに応えるのが大学だという見方に通じると思えるからだ。私はニーズというなら、むしろ学生のいわば「ニーズレベル」を引き上げる場が大学だと思う。そうでなければ、受験勉強で身につけた受け身の思考方法を身にしみこませたまま入学してくる「学生」、そしてもっぱら「正答」のみを覚え込もうとする姿勢からなかなか脱却できない学生のニーズレベルに合わせ、ただ知識を教え込むサービスの場が大学だということになる。それでは「学生」を学生に引き上げる場であるべき大学の存在意味がない。それは、いってみれば「学校」であり、大学は「学校」であってはならないのだと思う。誤解のないように付言すれば、私は決して学校を見下しているのではなく、教育機関としての役割と、その有り様の違いとしていっている。いずれにせよ、上述した状況の中で、大学は今や「学

校化」しつつあるのではないか、それが気になる第1の点である。

もう一つの気になっている問題というのは、妙な言い方ではあるが、大学の「健康」の問題である。といっても、身体的健康のことではない。そうではなく、述べてきたような大学多忙化の時代において、その多くが「他律的」といって差し支えないような各種業務に取り組む教員や職員が、こうした業務のあれこれに必ずしも意義を感じていない場合であっても、「流れ」には逆らえないとばかりに「達観」し、「ニヒル」に肅々と仕事をこなす雰囲気が大学に浸透しているように見受けられることである。こうした雰囲気が漂うなかで、実は大学構成員の「精神的健康」が損なわれ、ひいては大学そのものの衰弱過程が進行しているのではないかということである。教員や職員が仕事自体の意義をまともに考える猶予もなく、またそうする意欲さえ失わせるような目に見えない圧倒的な「力」を感じつつ、「心ならずも」仕事をしなければならない大学は、決して「健康な」大学とは言えないと思う。

どうしてそうなるのか。今の大学を取り巻く状況とそこにある困難は、個別大学の問題を超えたあまりにも大きく目に見えない「力が」根底にあるために、我々はあたかも逆らえない流れのようにしてそれを甘受せざるを得ないようになってきているからではないだろうか。勿論、こうした全体状況や流れの中で、個別大学が大学としてどのような道を選択するかは、それらの「力」が必ずしもすべてが明文上の強制力ではない限り、また選択如何によってはそれにとまなう「不利益」を度外視する覚悟があるならば、全く裁量の余地がないわけではない。例えば、私大への補助金は、平均して全大学の経常費の約15パーセントに過ぎないが、それでもこれを限りなく度外視し、かつ研究・教育条件のレベルを落とさないで大学としての独自のあり方をいかにして実現できるか、という難問が直ちに生起する。それだけに、大学としての判断、意志決定がきわめて重要であり、教授会での合意形成は当然のこととして、大学行政の最高意志決定機関としての法人・理事会の責任が今まで以上に大きくなっているのは間違いあるまい。

はっきりしていることは、今大学を突き動かしている力は、「流れ」にともかくも乗っていかないと「選択」と「集中」という競争原理、または市場原理のなかで大学そのものが「落ちこぼれる」かも知れないところにはまり込んだ全体状況と、そういう道筋を作ってきた一つの政策的流れである。そのことを多くの教員が感じているからこそ、かえってその圧倒的な力の前にある種の無力を感じ、それを見つめ直すことすら諦めさせる状態を作り出しているのではないかと思う。大学に漂うこうした冷めた雰囲気が、大学そのものを不健康な姿にしてしまっているのではないか。少なくとも、今や大学は、たんに法人（理事会）の責任だとか、法人に任せればよいといって済まされるような単純なレベルを超え、大学総体がそのあり方を否応なしに大きく変質させられようとしている実態と背景を冷静に認識し、大学が大学であるために何をすべきかについて、個別大学での徹底的な議論と総意の形成が求められていると言えよう。と同時に、大学のいわば非大学化の流れに対して、個別大学を超えた、まさに自立的で自律的な、そして協同的な取り組みを始めなければならないときが来ているように思われてならない。

学会活動は面白い

本 合 陽

(委員長 2005～2007 委員 2003～2004)

私は佐藤亮一先生の後を受け、2005年から2008年4月まで約3年間、東京女子大学学会の委員長を勤めさせていただきました。その間、学生研究奨励費を受けた学生達の発表の中から優秀な発表を選び、始業講演の日に発表することになり、2006年の始業講演の日に第1回目の優秀発表が行われ、それは2008年、大学90周年を記念して学生研究奨励賞の創設へと発展しました。

第1回目の優秀発表に選ばれたのは「江戸の町人文化を探る」と題する研究発表でした。第一回学生研究奨励賞を受賞したのは旧体育館に関する研究でした。旧体育館を使ったExileという人気グループのプロモーションビデオを発表の枕に使い、発表は大成功であったと思います。

学術交流会の記録号を学会ニュースとして刊行することも私が委員長であった時期に始まりました。学術交流会は森一郎氏の発案で2002年から始まったと聞いています。専門の話を学内で相互に行う機会が少ない教員に、学術的な話をする機会を設けることが本来の趣旨です。私は第5回学術交流会「女子高等教育の歴史と未来」の記録号に関わりました。2008年度の学術交流会「21世紀のリベラル・アーツ教育とは何か」の記録号も油井大三郎委員長の下、学会ニュース第159号として刊行されていますが、今回、学会活動とリベラル・アーツ教育を考える上で、この記録号がとても役に立ちました。

リベラル・アーツ教育と学生研究奨励費

議論を始める前に、本学でこれまで議論されてきたリベラル・アーツ教育を、『東京女子大学学会ニュース』第128号に掲載されている寺崎昌男氏の講演「大学と学校が迫られているもの」の記録と、前に述べた「21世紀のリベラル・アーツ教育とは何か」の記録に基づき整理しておきたいと思います。

寺崎氏が指摘するように、産業界の考えが「専門的力量の育成」から「自分で物事を決断できる人材」の育成へ変化しました。そうなる、リベラル・アーツを森氏の言うように「自由学芸」と訳し、古代的理念としての「自由人」を念頭に置く必要も出てきます。それは竹内久顕氏の述べる、「教養ある人」を「文化の全体構造を的確に把握するとともに自ら新しい文化の創造に関与する主体」と定義することにもつながるでしょうし、キャリアセンター長としての今村楯夫氏の言葉、「問題発見に必要とされる洞察力、思考力、分析力、創造力、表現力、実行力を主体的に培い、変化する社会の要求に柔軟に応え、生涯にわたって社会に貢献できる、自立した人格の基礎をつくること」にもつながるでしょう。

藤田英典氏はアメリカの場合、「知的教養と市民形成と人間形成が柱」であったと紹介します。誰もが市民としての自覚を持ち社会生活を送ることが民主主義の基礎であるならば、リベラル・アーツ教育を標榜する以上、本学は、学生一人一人が「自由人」として社会に出て行くことを可能にする教育の場を提供する必要があります。

もちろんそのためには、カリキュラム自体が今までに述べてきた理念に沿って構想されなければならないのは言うまでもありません。しかし、今村氏が「正課教育と正課外教育の連動」を指摘しているよ

うに、正課教育以外の場、カリキュラムを補う様々な場を提供することも大学の役割でしょう。その意味では今村氏や森氏も指摘するように、東京女子大学学会活動、その中でも学生研究奨励費は私たちの大学が提供するリベラル・アーツの一つの柱になる可能性を持っています。

学生研究奨励費の「正課教育と正課外教育の連動」の一例として、私が関わった事例を紹介したいと思います。2005年の学会ニュース第141号でも触れましたが、韓国系アメリカ人のDiana Sonによる*Stop Kiss*という戯曲を学生が翻訳し出版した研究です。商売にはなっていないようですが、販売ベースに乗せることができたのは、学生研究の成果としては画期的なことではないかと、助言者として密かに自負しています。

きっかけは、共通教育の二年次向け必修英語科目である読解の授業で作品を読んだことでした。それは読解の授業にグループ・ディスカッションを取り入れる試みを模索していた時期でもありました。英語を読むという作業を、学生が主体的に考える作業にしたいと思ったのです。その意味で、科白だけで成り立つ戯曲は、とても面白い題材に思えました。つまり、その人の気持ちになって考えないと、英語の意味がさっぱりわからないことが多いからです。

読解の授業としては賛否両論あると思いますが、この授業はかなりの成功を取めたと思います。授業の最後に、「この作品はまだ翻訳がありませんが、若いあなたたちが翻訳をすれば面白いでしょうね」という私の一言がきっかけになり、6名の学生が翻訳グループを作り、学生研究奨励費に申し込みました。下訳が完成し、戯曲の出版に関心を持ってくれそうな出版社を探し、私も一緒に交渉に行きました。そして、ある程度の金額を準備できれば出版しても良いという結論を引き出せたのです。ここでも学生研究奨励費の出版助成が大きな力となりました。

戯曲を翻訳するためには、戯曲を成り立たせている文化の構造を理解し、問題を認識し、解決に向けての構想力を持たねばなりません。また理解し、言葉にしていくためには、豊かな感性も必要でしょう。翻訳を本という形にしていくためには自ら行動する必要があるのは言うまでもありません。私が幸運にも関わった学生達は、わからないところがあれば様々な先生を捕まえては質問し、自分たちで翻訳のための合宿を企画・実行し、出版社との交渉もやりました。そういった意味で、先ほど整理したりベラル・アーツ教育が、学会活動を通して獲得されていった例とすることができるのではないのでしょうか。

今村氏がオープンテーマ演習と学生研究奨励費とをつなぐ可能性に触れています。オープンテーマ演習は「特プロ」を基に構想されたと聞きます。「特プロ」は、1学部として全員が入学し、2年次になるときに学科を決めていた頃、教員全員が自分の専門に立脚しながらも、学科のカリキュラムから自由な授業を持つというプログラムです。オープンテーマ演習も学生研究奨励費との連動という意味で興味深いプログラムですが、残念なのは、開講数が限られているため、多くの学生を巻き込めない所です。「特プロ」のようなプログラムを構想できないのでしょうか。

現在私は第一外国語運営委員でもあり、英語教育の全学共通化を進める立場にいます。その立場からすると、先ほど述べたような授業を必修科目の読解として行っていたことに対して、多少、迷いがあります。果たして必修科目の英語教育になじむ方法論であったらうかと。しかし、それでも一つの可能性を信じているのも事実です。こういった問題を考えるためには、英語教育のあり方を巡る議論を紹介する必要があると思えます。

英語教育と学生研究奨励費

1974年に参議院議員の平泉渉が英語教育改革案を政務調査会に提出し、それに対して上智大学教授

渡部昇一が反論した『英語教育大論争』というものがあります。平泉氏が非効率的な日本の英語教育を抜本的に変える変革案を提示し、それに対して渡部氏が「英語教育は知的訓練の一環として行われるべきである」と反論した議論です。『群青』第2号の特集、「大学の英語教育を糺す」で、目白大学の竹前文夫氏がその論争を紹介し、平泉氏の見解を要約した上で、英語教育に関し、「技能教育を伴うだけに、プログラムとしてカリキュラム全体で対処することが求められている。高等教育の大綱化・自由化以降は、外国語も必修枠をはずされたのであるから、各教育機関がしっかりした教育理念をもち、その上で各学部の希望を取り入れたカリキュラムを構築」することが必要だと述べます。

竹前氏が述べるように、英語教育は「技能教育」である面は否めません。本学の英語教育は現在、1学部化したことを受け、技能教育に大きく舵を切ったと言えます。それを示す典型的な例として、Communication Skills という1年次の必修科目は、共通テキストを使い、統一テストを行うようになったことを挙げることができます。読解の授業も、1年次、2年次ともに共通テキストを導入し、いわば技能の品質保証へ向かう方針を、第一外国語委員会として決めただけです。私自身、その委員会のメンバーです。情報を正確に、しかも迅速に仕入れるためには技能としての英語力は必要です。しかし、それはあくまでも基礎体力作りに過ぎないことも、また一面での真実です。

英語教育のもう一つの方法論に、ESP、つまり English for Specific Purpose というのがあります。ある技能に特化した英語のクラスを設ける方法です。我が校でも選択科目として、例えば Translation, Writing, Reading and Discussion, Journalistic English, Drama, TOEIC 講座といったかなりの数の科目を設けています。

そこでちょっと気になることがあります。学生研究奨励費に関することです。私が学会の委員であった時期に限ってのことではありますが、この ESP のクラスに端を発すると思われる学生研究は思いつきません。ESP と言うのであれば、その「特定の目的」を発展させる研究があっても良いのではないかと思います。本学の英語カリキュラムは技能教育に傾きすぎている嫌いはないだろうか、とちょっと気になってきました。

前述の寺崎氏は立教大学の改革例で外国語教育にも触れ、「communicative と literary の二つのコースから選択する方式」を採用したと述べます。communicative を選んだ学生は、レベルによって分け、共通テキストを用い、共通の評価を行う改革を行ったそうです。

本学の場合、英語教育は売りの一つですから、全学生に一定程度の技能を保証する必要があるのは確かです。しかし、基礎作りは1年次でしっかり行い、2年次は選択必修的な科目構成にすることも考えられます。例えば、Reading II も ESP の延長上に構想し、色々なパターンの読解のクラスを用意するのです。1年次の目標は一定の技能としての英語の習熟に置き、その後は、様々な選択肢から学生が選んで受講する。主体的に選ぶことで、英語のクラスがきっかけとなり、学生奨励研究を目指す学生が増えるかもしれません。

終わりに

私が述べたような例は、渡部氏の流れにある「知的訓練の一環」に過ぎないかもしれません。また本学の場合、キャリア・イングリッシュ課程との関係も考える必要があります。しかし、全学カリキュラムとしての英語のあり方自体、もっと全学的に議論されても良いのではないのでしょうか。

東京女子大学の学会活動で、学生研究奨励費は特にユニークな制度でしょう。正課教育と正課外教育の連動の場であり、リベラル・アーツ教育の果実の実る畑でもあるでしょう。オープンテーマ演習以上

に、もっと多くの学生が関わる可能性を秘めた科目として、英語科目の位置づけを考え直すことに大きな可能性を、私は感じています。

第3部

資料篇

東京女子大学學會の發足

五月廿九日に發會式

かねて計畫準備中であつた東京女子大學學會は、教授間の研究とその協力を促進し、學生の學問活動を助長し、また同窓卒業生の知識増進に資する趣旨において、新學年度から發足した。その組織は本學教授（客員及兼任教授をふくむ）・助教・講師・助手・囑託・職員有志と、學生および卒業生を會員とし、實際研究活動は、哲學（心理學をふくむ）・日本文學・英米文學・社會科學（歴史學をふくむ）・自然科學・數學・體育學の諸部門にわかれて、本學研究室を中心にこなされる立前であり、すでに社會科學部會・日本文學部會をはじめ定期研究會が發足しつつあるが、正式發會式は來る五月廿九日記念學術講演會及報告會によりおこなわれる豫定である。本學會の一特色は本大學の學會として、學生及卒業生の學問知識の獎勵増進に資することをふくむ點で、一般の協力が期待せられている（詳細續報）。

企劃を新にした研究組織

東京女子大學學會

教授・學生の熱意の發足

前號新報のように東京女子大學學會は五月廿九日發會式と記念講演會・部別研究會をもつて正式に出發した。同日は平常の講義をとりやめて全學關係者参加のことに休んで全學關係者参加のことに劃期的な學的プログラムがなされた。とくに午後三時からは諸部門において眞摯な討議や研究計畫の相談がなされ、今後の活動發展が期されている。學會準備委員柳文教授は次のように語つた。「本學會は趣旨にもあるように、この時代の苦悶の中で本學の立場から何かに先んでゆくべきで、研究上の助け合いと學問的監視を學内に一層高めようとする。ことに關係部門や研究主題についての組織的協力を、幾分野で書願度いのです。これは本學諸科の交流となり本學らしい學問をつくる所だと信じます。それで専任の先生方の外任の方、助手、學生、同窓生の皆さんに参加して頂いて、一しよになつて之を兼ねてゆくことを切望してゐる次第です」。

東京女子大學學會趣旨

わが東京女子大學の創立にあつて當初から目標とされたところは、之を本部における女子最高學府たらしめんとしたことである。これは其後の發展において終極意識せられ、一般に本學のアカデミックな學風を印象づけてきたのである。今般、新制大學に加ふるに短期大學を併せた複雑的發展と社會的任務が要請せられるにあら、われわれはこの理念を順次ともよみに自ら自己批判と解決意を加えるをえない。すなわち右の理念は、本學を本據として、現代社會にならば指導的職を期待せられることと、「東京女子大學の學問」の建設をもつて、よく裏付けされたか否かの問題から出發して、低調にして依他の進流にして事務的たるを脱しないのが、從來日本女子教育の一般であつたが、今日舊日本の誕生にぞんでかかる隨性的態度はゆるぎない。封建日本打破の道程は明治以來の外面的變革をもつて完了せられえず、敗戦の道徳的審判は、鋭く辛苦の日本社會の近代化を終

了するまでは、われらに救いなきことを宣告している。おもひは、基督教をもつてたつた本學においてこそ、女性の人間復興を成就し眞の日本近代化を眞現すべき道が、たかく照明せらるべき理由が存したのであつた。いまや本學は、ふたつ婦人の部門化と事務家的功利から女性を解放し、時代の苦悶に服し、つゞつ彼力をそむくこと、新たな學問創造に邁進せねばならぬのである。かような重大課題に對しては、決して安易な既成の體系のみをもつてのぞむことはできない。今日は長老も青年も専門家も學生も、ひとしく謙虚に管理をもとめて再出發すべき秋である。そこでは個性獨創の研鑽とともに、單なる協定を超えて學の交流・協力をもつて、今後の學問は究せられねばならぬ。本學において神の至高の慈みのもとに學問の自由を眞現し、各研究部門を中心にひろく學界に提供すべき諸々の研究と、その學問的基礎の上に、學生、同窓生との進歩研學とが、本學會の組織を媒介としてなされ、今後不斷の邁進をもつて本學學運を支えんとすることを要請してやまぬものである。

學會暫定要綱

名 稱 本會は東京女子大學學會と稱す。
 目的 本會は東京女子大學における學術研究の促進を目的とする。
 事業 本會の目的を達成するため左の事業を行う。

1. 各研究部門における諸般の個別のならびに共同的研究の運営・促進
2. 機關雜誌・學術報告書等の刊行
3. 講演會・講座・展覽會等の開催
4. 内外諸學界との連絡
5. 其他本會の目的達成に適切なる事業

研究部門 本會の研究部門を日本文學・英米文學・哲學・社會科學・自然科學・數學・體育學等とわかつ
 會員 本會の會員は普通會員（本學教授職員兼任者）をふくむ。學生會員、同窓生會員、特別會員（會長の推薦によりさだめる）の四種にわかつ
 役員 本會に會長一名・幹事若干名・運営委員若干名を置く
 運営 本會の運営に必要な細目は當分の運営委員會がこれをさだめ、かつ運営にあたる
 會員總會 本會は毎年一回會員總會をひらく、會長必要とみなしたときは臨時會員總會をひらくことが出来る
 會計 本會の經費は會費・補助金・寄附金等をもつて支辨する、會費については別にさだめる
 事務所 本會の事務所は東京女子大學内に置く

發會式及記念行事

- 發會式 齋藤學長
 發會式式辭 學會準備委員代表 柳文教授
 記念講演 東京女子大學學會趣旨
 人文部門 「ゲーテの畏敬」 客員教授 小宮豊隆
 社會部門 「世界平和の經濟的基礎」 經濟學博士 赤松要
 自然部門 「化學療法について」 藥學博士 平野四郎
 哲學部會 哲學博士 石原謙
 日本文學部會 文學博士 藤野野矢
 「アウグスティヌスの内的發展」 講 師 岡崎義惠
 「日本文藝の世界的位置」 文學博士 齋藤 勇
 「M. Kierkegaard」 文學博士 齋藤 勇
 社會科學部會 「大化改新の諸問題」 教 授 川上多助
 自然科學部會 自然科學部會 教授 平野四郎
 「科學領域の研究態度」 教授 平野四郎
 右の後化學・生物學・數學・物理學・體育學の小組會

東京女子大学学会会則

※現行(2009年度以降)

第1条 (総則) この会は、東京女子大学学会(以下「本会」という。) The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University と称する。

2項 本会の事務所を東京女子大学(以下「本学」という。)内に置く。

第2条 (目的) 本会は、本学における教員及び学生による学術研究の促進を目的とする。

第3条 (事業) 本会の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 各研究部門における諸般の個別研究並びに共同的研究の運営促進
- (2) 学生による諸般の個別研究並びに共同的研究の運営促進
- (3) 機関紙、学術報告書等の刊行
- (4) 講演会、研究発表会、講座等の開催
- (5) 内外諸学会との連絡
- (6) その他の適当な事業

第4条 (会員) 本会は、次の3種の会員からなる。

- (1) 通常会員 本学専任教員
- (2) 学生会員 本学在学学生
- (3) 準会員 委員会で特に認められた者

2項 会員は、本会機関紙の配布を受け、前条の諸事業に参加することができる。

第5条 (役員) 本会に会長1名、監事2名、委員若干名を置く。

2項 会長は、会務を総括する。

3項 監事は、会計を監査する。

4項 委員は、委員会を組織し、会務を審議する。

5項 委員会は、委員長1名及び常務委員若干名を互選し、会務の直接の運営を委ねる。

第6条 (役員選任等) 会長は、本学学長をもって当てる。

2項 監事は、会長が指名する。

3項 委員は、各研究部門より原則として2名ずつ推薦し、総会において決定する。

4項 委員の任期は、1年とする。ただし、再選をさまたげない。

第7条 (総会) 総会は、毎年1回開催する。ただし、臨時開催をさまたげない。

2項 総会の決議は、出席会員の過半数をもってする。

第8条 (会計) 本会の経費は、会費、補助金、寄附金等をもって支弁する。

2項 会員は、所定の会費を納める。

3項 本会の予算及び決算は、総会の決議及び承認を経なければならない。

第9条 (会則の変更) 本会会則の変更は、通常会員を含めて会員3名以上の賛成を経て提出された動議に基づき、総会で審議の結果、出席会員の3分の2以上の賛成を得たときに行う。

第10条 (細則、規程) 本会会則施行に当たって、別に細則及び規程を設ける。

2項 細則及び規程の変更は、委員会において出席委員の半数以上の賛成を得たときに行う。

東京女子大学学会細則

- 第1条（研究部門）本会の研究部門を、哲学（キリスト教学を含む。）、日本文学、英語文学文化、史学、国際関係、社会学、経済学、心理学、コミュニケーション、言語、数学、自然科学・情報処理、教育学・博物館学、外国語、健康・運動科学、音楽の各部門に分かつ。
- 第2条（会費）会費は、通常会員及び準会員が年額4,000円、学生会員が年額1,500円とする。ただし、学生会員は在学予定年数に応じて一括納入する。
- 第3条（機関紙）本会の機関紙として、「東京女子大学学会ニュース」を発行する。
- 第4条（会期）本会の年度は、毎年4月1日から翌年3月末日までとし、4月に総会を開くことを原則とする。

学会 歴代会長・委員長

年度	会長 (学長)	委員長
1950	斎藤 勇	—
1951	斎藤 勇	評議委員長 平野 四郎
1952	斎藤 勇	評議委員長 平野 四郎
1953	斎藤 勇	評議委員長 岩間 徹
1954	高木 貞二	評議委員長 柳父 徳太郎
1955	高木 貞二	評議委員長 柳父 徳太郎
1956	高木 貞二	岩間 徹
1957	高木 貞二	岩間 徹
1958	高木 貞二	岩間 徹
1959	高木 貞二	岩間 徹
1960	高木 貞二	岩間 徹
1961	高木 貞二	岩間 徹
1962	高木 貞二	玉虫 文一
1963	高木 貞二	玉虫 文一
1964	高木/木村	玉虫 文一
1965	木村 健二郎	玉虫 文一
1966	木村 健二郎	玉虫 文一
1967	木村 健二郎	玉虫 文一
1968	木村/宮本	古屋野 正伍
1969	宮本 武之助	古屋野 正伍
1970	宮本 武之助	古屋野 正伍
1971	宮本 武之助	古屋野 正伍
1972	宮本 武之助	静間 良次
1973	原島 鮮	静間 良次
1974	原島 鮮	静間 良次
1975	原島 鮮	静間 良次
1976	原島 鮮	静間 良次
1977	原島 鮮	静間 良次

年度	会長 (学長)	委員長
1978	原島 鮮	静間 良次
1979	原島 鮮	静間 良次
1980	隅谷 三喜男	静間 良次
1981	隅谷 三喜男	静間 良次
1982	隅谷 三喜男	静間 良次
1983	隅谷 三喜男	静間 良次
1984	隅谷 三喜男	大隅 和雄
1985	隅谷 三喜男	大隅 和雄
1986	隅谷 三喜男	代) 塚本 三夫
1987	隅谷 三喜男	大隅 和雄
1988	京極 純一	塚本 三夫
1989	京極 純一	塚本 三夫
1990	京極 純一	塚本 三夫
1991	京極 純一	塚本 三夫
1992	山本 信	今村 楯夫
1993	山本 信	今村 楯夫
1994	山本 信	今村 楯夫
1995	山本 信	今村 楯夫
1996	山本 信	近藤 武
1997	山本 信	近藤 武
1998	船本 弘毅	兼若 逸之
1999	船本 弘毅	兼若 逸之
2000	船本 弘毅	兼若 逸之
2001	船本 弘毅	森 一郎
2002	湊 晶子	森 一郎
2003	湊 晶子	佐藤 亮一
2004	湊 晶子	佐藤 亮一
2005	湊 晶子	本合 陽
2006	湊 晶子	本合 陽
2007	湊 晶子	本合 陽
2008	湊 晶子	油井 大三郎
2009	湊 晶子	油井 大三郎

学会 部会編成表

学会会則 1950年5月29日 制定
 学会細則 1950年5月29日 施行 →部会に関する規定

主な時期の部会編成

* 学会発足時	1950年 (S.25年) 〈学会規則 第4条〉	日本文学 英米文学 哲学 教育 社会科学 自然科学 数学 体育 等
* 会則改正時	1956年 (S.31年) 〈学会細則〉	哲学 (教育学を含む) 日本文学 英米文学 社会経済学 歴史学 心理学 自然科学 体育
* 2009年度 現代教養学部 新設以前	2008年 〈学会細則〉	哲学 (キリスト教学を含む) 教育学・博物館学 日本文学 英米文学 史学 社会学 (経済学を含む) 心理学 数学 自然科学・情報処理 外国語 健康・運動科学 音楽 コミュニケーション 地域文化 言語文化
* 現行	2009年 (H.21年) 〈学会細則〉	哲学 (キリスト教学を含む) 日本文学 英語文学文化 史学 国際関係 社会学 経済学 心理学 コミュニケーション 言語 数学 自然科学・情報処理 教育学・博物館学 外国語 健康・運動科学 音楽

始業講演リスト

▼校地：善福寺

	年 度	講 演 者	題 目	要旨掲載 論 集	備 考
	1951 前期	酒井 瞭吉 教 授	アリストテレスのプロトゥレプティコス		
	1951 後期	岩間 徹 助教授	ロシアの独裁政治について		
	1952 前期	笹淵 友一 教 授	近代文学の課題		
	1952 後期	平野 四郎 教 授	コーチソンと ACTH		
	1953 前期	柳父徳太郎 教 授	経済学と文学との交渉 — 戦略的行動の理論に関連して—		
	1953 後期	小泉 一郎 教 授	エマソンとモンテーニュ		
	1954 前期	長 寿吉 客員教授	ヴィコ哲学と近代歴史学		
	1954 後期	白井 常 教 授	産業心理学における心理学界の最近の問題について		
	1955 前期	天利 長三 教 授	日本の貨幣経済		
	1955 後期	小林 薫一 教 授	群と幾何学		
	1956 前期	名倉英三郎 助教授	フランスの文化と教育		
	1956 後期	村田 豊文 教 授	マックス・シェーラーの客観主義価値論		
	1957 前期	藤森 朋夫 教 授	万葉に生きる人々		
	1957 後期	内海 千江 教 授	生活と姿勢問題		
	1958 前期	渡辺 正雄 助教授	アメリカ科学の黎明— Cotton Mather: Christian Philosopher を中心として—		
	1958 後期	柳父徳太郎 教 授	日本経済のヤースス的性格		
	1959 前期	松浦 嘉一 教 授	T. S. Eliot の古稀記念論文集について		
	1959 後期	多羅尾四郎 教 授	細胞の微細構造とその機能		
	1960 前期	宇野 脩平 助教授	明治初年の商権回復運動		
	1960 後期	小河原正巳 教 授	変動現象の統計的推論		
	1961 前期	松川 成夫 教 授	大学の成立		
	1962 前期	森 敏吉 教 授	闘争と殺りく		
	1962 後期	酒井 瞭吉 教 授	存在論と神の問題		
	1963 前期	森岡 健二 教 授	沖縄の言語と文学	14 卷-1 号	
	1963 後期	古屋野正伍 教 授	現代都市の社会問題		
	1964 前期	佐山栄太郎 教 授	ジョン・ダンの説教文学	15 卷-1 号	
	1964 後期	中谷 太郎 教 授	数学的構造と教育	15 卷-2 号	
	1965 前期	松村 緑 教 授	太田垣 蓮月一人とその作品—	16 卷-1 号	
	1965 後期	鳥山 英雄 教 授	「生存」と科学	17 卷-1 号	
	1966 前期	渡辺美知夫 教 授	欠如の文学— Graham Green の場合—	17 卷-2 号	
	1966 後期	伊藤 善市 教 授	都市開発の課題		
	1967 前期	高田洋一郎 教 授	心理学の出発点	18 卷-1 号	
	1967 後期	池宮 英才 教 授	東洋の音楽と西洋の音楽—マックス・ウェー バーの〈音楽社会学〉をめぐって—	18 卷-2 号	
	1968 前期	山根 幸夫 教 授	日本人の中国観—内藤湖南と吉野作造の 場合	19 卷-1 号	
	1968 後期	小川 圭治 教 授	西田幾多郎と S・キルケゴール	19 卷-2 号	
	1969 前期	遠藤 真二 教 授	物理学における空間と時間	20 卷-合併号	
	1970 前期	静間 良次 教 授	現代数学の道標	21 卷-1 号	
	1970 後期	丸山キヨ子 教 授	紫式部と宗教	21 卷-2 号	
	1971	千足 高保 教 授	ドイツについて	22 卷-合併号	

年 度	講 演 者	題 目	要旨掲載 論 集	備 考
1972	江口 裕子 教 授	フランスにおけるエドガア・ポオの影響 と評価について	23巻-1号	
1973	栗原 福也 教 授	ホイジンガと現代	24巻-1号	
1974	新田 倫義 教 授	人間の可能性	25巻-1号	
1975	泉 志津枝 教 授	リズムと健康	26巻-1号	
1976	岩間 徹 教 授	歴史の教訓	27巻-1号	
1977	久米あつみ 教 授	カルヴァンとユマニスム	28巻-1号	
1978	黒星 瑩一 教 授	現代の宇宙物理学と常識	29巻-1号	
1979	山本 幸一 教 授	数学と想像力	30巻-1号	
1980	水谷 静夫 教 授	国語学を創る	31巻-1号	
1981	高村 新一 教 授	パニヤンについて	32巻-1号	
1982	宮崎 犀一 教 授	見るべき人・思うべき事	33巻-1号	
1983	江口 裕子 教 授	エドガア・アラン・ポオ —夢見る魂の出会い—	34巻-1号	
1984	井上 早苗 教 授	障害児の発達をたすける	35巻-1号	
1985	池宮 英才 教 授	バッハ・ヘンデルと前古典派の音楽	36巻-1号	
1986	平野 邦雄 教 授	歴史における先入観	37巻-1号	
1987	島 美喜子 教 授	21世紀への化学—高分子と分子設計—	38巻-1号	
1988	根岸 愛子 教 授	“無限遠”をめぐる—常識に挑戦する—	39巻-1号	
1989	山本 信 教 授	自己への問い	40巻-1号	
1990	鳥居フミ子 教 授	伝承と文芸—金太郎の誕生—	41巻-1号	
1991	二宮 フサ 教 授	ヴェルサイユからアユタヤへ —十七世紀ショワジ師の船旅—	42巻-1号	
1992	宮川 實 教 授	人口の高齢化と要援護老人問題	43巻-1号	
1993	小池 滋 教 授	文学と時間	44巻-1号	
1994	広瀬 弘忠 教 授	エイズと社会	45巻-1号	
1995	鳥越 成代 教 授	スペースシャトルの中の運動—微重力の 世界は心身にどんな影響を及ぼすか—	46巻-1号	
1996	今井 宏 教 授	ピューリタン革命を生きた二人	47巻-1号	
1997	Dennis E. Schneider 教 授	Teaching and Learning Foreign Languages	48巻-1号	
1998	守屋 彰夫 教 授	聖書の自然観—環境問題への視座—	49巻-1号	
1999	小島 覺 教 授	環境保全の世紀に向かって	50巻-1号	
2000	永山 操 助教授	情報化社会を生きる力	51巻-1号	
2001	轟 莉莉 助教授	文化人類学から見たジェンダー	52巻-1号	
2002	今村 楯夫 教 授	『老人と海』と猫	53巻-1号	
2003	栗田 啓子 教 授	水がほしい —歴史のなかの地域開発と水資源—	54巻-1号	
2004	大久保喬樹 教 授	ポストモダン文明の予言者 岡倉天心	55巻-1号	
2005	黒崎 政男 教 授	デジタルを哲学する	56巻-1号	
2006	眞田 雅子 教 授	ことばが育つ	57巻-1号	
2007	牛島 定信 教 授	変わりゆく現代人の人格構造	58巻-1号	
2008	湊 晶子 学 長	東京女子大学の90年の歴史とこれから —キリスト教を基盤とした本学のリベラル・ アーツ—	59巻-1号	創立90周年 記念講演
2009	中内 潔 教 授	コラールとオルガン作品 —コラール編曲の妙技を探る—	60巻-1号	
2010	下出 鉄男 教 授	中国智識人の第二次世界大戦観 —費孝通の場合—	61巻-1号 (予定)	

▼校地：牟礼

	年 度	講 演 者	題 目	要 旨 掲 載 論 集	備 考
短期大学部	1967	岩間 徹 教 授	19世紀のロシアをどうみるか	18巻-1号	
	1968	竹脇 潔 教 授	脊椎動物における色素細胞の調節	19巻-1号	
	1969	斎藤 勇 教 授	“自然にかえれ”の意義		
	1970	北沢 佐雄 教 授	新渡戸稲造と人生観		
	1971	木幡 瑞枝 教 授	芸術と自然		
	1972	藤田 清次 教 授	George Eliot と現代小説	23巻-1号	
	1973	吉田 熙生 教 授	芥川龍之介論	24巻-1号	
	1974	近田 一郎 教 授	「感じる・考える・書く・描く」 —わたしの修行体験から—	25巻-1号	
	1975	関屋 光彦 教 授	人物評価の基準について —すぐれた人々の実例にふれつつ—	26巻-1号	
	1976	小林 祐子 教 授	身ぶりとことば	27巻-1号	
	1977	猿谷 要 教 授	カーター大統領と南部の風土	28巻-1号	
	1978	見藤 隆子 教 授	出会いへの道	29巻-1号	
	1979	櫻井美智子 教 授	わが国における言語学の成立	30巻-1号	
	1980	進藤 咲子 教 授	文章が近代化するということ —福沢論吉と二葉亭四迷とを中心に—	31巻-1号	
	1981	川村 輝典 教 授	キリスト教と科学	32巻-1号	
	1982	山本 英治 教 授	ヒマラヤの人々の生活と文化	33巻-1号	
	1983	Louis Levi 教 授	English Social Conversation	34巻-1号	
	1984	北條 文緒 教 授	英国幽霊物語	35巻-1号	
1985	川竹 和夫 教 授	テレビのなかの外国文化	36巻-1号		
1986	古崎 愛子 教 授	心で見る世界	37巻-1号		
1987	池 明観 教 授	歴史について —ハンナ・アレントの思想を中心に	38巻-1号		
現代文化学部・ 短期大学部	1988	Richard L. Spear 教 授	Language and Language Learning	39巻-1号	
現代文化学部	1989	寺澤 芳雄 教 授	聖書と英語文化	40巻-1号	
	1990	森本 哲郎 教 授	二十一世紀への視線 —文化の相互理解について—	41巻-1号	
	1991	川竹 和夫 教 授	外国のメディアが伝える日本のイメージ	42巻-1号	
	1992	竹田 晃 教 授	大学とは「おとなの学」	43巻-1号	
	1993	山本 英治 教 授	古代社会の近代化—貧しいが豊かなヒマ ラヤの王国ブータン—	44巻-1号	
	1994	小林 祐子 教 授	ノンバーバル・コミュニケーション —ことばによらない伝え合い		
	1995	李 敏鎬 教 授	20世紀末に立って	46巻-1号	
	1996	野崎 茂 教 授	メディアと人間	47巻-1号	

連続講演会リスト

▼ 校地：善福寺

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会 ・ 講師	所属／肩書	学会ニュース 掲載号数
1954	〈第1回 公開講座〉 歴史—米と人口と歴史 経済—家計と国民経済会計 日本文学—ダンテと北村透谷 英文学—現代英国詩壇 心理学—現代心理学の諸傾向 自然科学—生物の進化	大森 志郎 柳父徳太郎 笹淵 友一 斎藤 勇 高木 貞二 多羅尾四郎	本学教授 本学教授 本学教授 本学客員教授 本学学長 本学教授	
1955	〈第2回 公開講座〉 *比較文化研究所と共催 歴史—日・鮮・中国関係の昔と今 文学—イギリスの詩とアメリカの詩 哲学—ゲーテと日本人の心情 文学—斎藤茂吉の短歌について 比較文学—能と欧米人 比較文化—日本人の言語生活と訳語 経済学—景気と貨幣 心理学—パースナリティーと発達	エドウィン・ ライシャワー 加納 秀夫 村田 豊文 藤森 朋夫 古川 久 森岡 健二 天利 長三 白井 常	ハーバード大学教授 本学兼任教授 本学教授 本学教授 本学教授 本学助教 本学兼任教授 本学教授	
1961	「植民地問題と民族主義運動」 植民地問題の歴史的背景と現状 今日の民族主義運動 1. アラブ 今日の民族主義運動 2. アジア 民族主義運動の国際的影響	(社会学) 板垣 与一 牟田口義郎 梶谷 善久 江口 朴郎		【要旨掲載】 論集 12巻-2号
1962	「宇宙科学」 現代の宇宙像 人間衛星をめぐる 隕石の研究 宇宙生物学	(物理学) 小尾 信弥 新羅 一郎 村山 定男 中村 浩		【要旨掲載】 論集 13巻-2号
1963	「世界のなかの日本文学」 欧米における日本文学 中国文学と日本文学 歴史と日本文学 日本文学と西欧文学 日本演劇と西欧演劇	(日本文学) 中野 好夫 神田 秀夫 山本 健吉 矢野 禾積 遠藤 慎吾	評論家 共立女子大学教授・本学講師 評論家 東洋大学教授	【要旨掲載】 論集 14巻-2号
1964	「現代日本の政治状況」 現代日本の政治と憲法—憲法改正問題— 選挙と政治 労働運動と現代日本の政治 現代日本の外交問題 現代日本の政治と社会	小林 直樹 柚 正夫 塩田庄兵衛 大森 実 日高 六郎	東京大学教授 千葉大学助教授 東京都立大学教授 毎日新聞社外信部長 東京大学教授	【報告】 論集 15巻-2号
1965	「外国文学と教養」 アメリカの小説—その特質と現代的意義— シェイクスピアについて—エリザベス時代を背景として— 世界の中の日本文学	大橋健三郎 小津 次郎 篠田 一士	東京大学 東京大学 東京都立大学	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属／肩書	学会ニュース掲載号数
	外国文学と教養	福田 恒存	評論家	
1966	「社会的人間」			
	人格形成 青年期 親子関係 子供の精神衛生 適応の障害	左治 守夫 西平 直善 津守 真 玉井 収介 加藤 正明	精神衛生研究所 山梨大学 お茶の水女子大学 精神衛生研究所 精神衛生研究所	
1967	「実存思想の系譜」			
	キルケゴール パスカル ニーチェ ハイデガー サルトル	梶田啓三郎 平岡 昇 吉沢伝三郎 川原 栄峯 鈴木 道彦	東京都立大学教授 早稲田大学客員教授 東京都立大学助教授 早稲田大学教授 一橋大学助教授	
1968	「情報科学」			
	数理言語学とオートマン 情報理論 学習指導への情報科学的接近 頭脳のトポロジー バイオニクス	高須 達 国沢 清典 東 洋 野口 広 南雲 仁一	京都大学教授 東京工業大学教授 東京大学助教授 早稲田大学教授 東京大学教授	
1970	「フランス文化の諸相」	外国語		
	フランス現代文学の意味 現代仏映画の状況 ストラヴィンスキーと現代音楽 フランスの大学問題 フランスのゴシック美術	平井 啓之 Michel Midan 遠山 一行 阿部 良雄 富永 良子	フランス文学者 日仏学院院長 桐朋学園大学教授 東京大学助教授 芝浦工業大学助教授	
1971		音楽		
	「かたち」をつくることの意味 霊の文化—現代社会と原始芸術— 民族音楽からみた日本音楽 ジャン・ジャック・ルソーの社会観と音楽観	森 有正 北沢 方邦 小泉 文夫 海老沢 敏	パリ第3大学客員教授 桐朋学園大学助教授 東京芸術大学助教授 国立音楽大学教授	
1973	「古代世界の再発見」	歴史学		
	古代日本と朝鮮 万葉集—歌風の流れと時代的背景— 古代史の見方 中国考古学の旅	井上 光貞 五味 智英 石母田 正 関野 雄	東京大学教授 学習院大学教授 法政大学教授 東京大学教授	
1974	「歴史と文学」	日本文学		
	I 軍記物語の世界 (全2回) 平家物語について 太平記について II 志賀直哉の生活と作品 (全3回)	永井 路子 阿川 弘之	作家 作家	
1975	「現代マンガ作家と作品—」	社会学		3号
	手塚 治虫 楳図 かずお 園山 俊二 里中 満智子	手塚 治虫 楳図かずお 園山 俊二 里中満智子	漫画家 漫画家 漫画家 漫画家	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属／肩書	学会ニュース掲載号数
	さいとう たかを	さいとうたかを	漫画家	
1976	「現代における進化思想」	自然科学		7号
	進化思想の流れ 植物の進化 ネズミの染色体と進化 生命の起源と進化 宇宙の進化	八杉 竜一 前川 文夫 吉田 俊秀 野田 春彦 小尾 信彌	早稲田大学教授 東京大学名誉教授 国立遺伝学研究所部長 東京大学教授 東京大学教授	
1977	「女性—英米文学・英語学からのアプローチ」	英米文学		10号
	The Woman Writer in a Changing Society ジェーン・オースティンとその娘たち —伝統の継承と反逆— 英語の中の女性語 現代アメリカの女性詩人たち	Dalma H. Brunauer 川本 静子 井出 祥子 渥美 育子	Clarkson 大学教授 津田塾大学教授 日本女子大学助教授 日本女子大学助教授	
1978	「災害と情報」	心理学		14号
	地震と情報 地震予知 災害に関する社会心理学的研究 マスコミと災害情報	岡部 慶三 末広 重二 鈴木 裕久 柳田 邦男	東京大学教授 気象庁参事官 東京大学助教授 評論家・NHK 解説委員	
1979	「現代人の魂の問題」	哲学		18号
	日本学と哲学 宗教的回心について 現代青年の心理的特徴 ユング心理学と宗教	梅原 猛 赤星 進 福島 章 樋口 和彦	京都市立芸術大学学長 小川赤十字病院精神科部長 上智大学教授 同志社大学教授	
1980	「現代数学の諸相」	数学		21号
	数学と物理学 低次元トポロジーの面白さと難しさ 数学における形式と実体について ランプパターンの転移問題—単因子論の一応用—	佐藤 幹夫 本間 龍夫 伊藤 清 岩堀 長慶	京都大学数理解析研究所教授 東京工業大学教授 学習院大学教授 東京大学教授	
1981	「現代中国をどう見るか」	外国語 (中国語)		26号
	日本人にとっての中国像 中国の経済—“四つの現代化”のゆくえ 中国の科学技術 私の見た中国	丸山 昇 小島 麗逸 牧野 昇 郭 淑瑀	東京大学教授 アジア経済研究所主任調査研究員 三菱総合研究所取締役副社長 天津外語学院副教授	
1982	「モーツァルトの音楽」	音楽		30号
	モーツァルトの音の世界 ジョイント・コンサート	海老沢 敏 宗 施月子 宗 倫匡	国立音楽大学学長 (ピアノ)・(バイオリン)	
	「保健随想—健康な精神は健康な身体に宿るか」	保健体育		30号
	保健随想—健康な精神は健康な身体に宿るか	重田 定正	元東京大学教授	
1983	「歴史の中の建造物」	史学		36号
	アンコール・ワットと東南アジアの歴史展開 歴史の中のビザンツ聖堂 平安時代初期の庭園	石澤 良昭 尚樹啓太郎 吉川 需	上智大学アジア文化研究所教授 東海大学教授 日本大学教授・文化財保護審議会専門委員	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属／肩書	学会ニュース掲載号数
	古代の神社建築	稲垣 栄三	東京大学教授	
1984	「日本文学の伝統」	日本文学		38号
	『百人一首』の仏訳英訳をめぐって * (日本文学部会、外国語部会フランス語共同企画) 比較文学者から見た日本文学の伝統 能と狂言 古代文学の復原—筑波山のうた—	Jacqueline Pigeot 島田 謹二 小山 弘志 益田 勝実	パリ第7大学教授 元東京大学教授 国文学研究資料館館長 法政大学教授	
1985	「世界の経済が今問いかけるもの」	社会学		45号
	アジアと日本 アメリカ経済と日本 —日米経済摩擦をどう解決するか?— 現代イギリス経済の危機 —いわゆる『英国病』の周辺— バム鉄道とシベリア開発 日本の平和と人類の生存	篠原三代平 佐藤 定幸 毛利 建三 野々村一雄 川田 侃	国際商科大学教授 一橋大学経済研究所教授 東京大学社会科学研所教授 千葉商科大学教授 上智大学教授	
1986	「宇宙科学と人間」	自然科学		49号
	宇宙産業時代の開幕 つぶれた星を探る—ブラックホールの話— 宇宙と生命 地球上の生態系とその保全 遺伝情報の起源	木村 繁 小田 稔 清水 幹夫 沼田 眞 三浦謹一郎	元朝日新聞科学部長 文部省宇宙科学研究所所長 文部省宇宙科学研究所教授 千葉大学名誉教授 東京大学教授	
1987	「文化と社会—英米文学を中心に—」	英米文学		52号
	The Postwar American Scene: Culture and Ideas in America Since 1945 アメリカ現代詩と社会 —ポピュラーソングとのかかわりについて— 言葉と文学 チャーサーとシェイクスピア—自然観をめぐって— イギリス小説とフェミニズム	Ihab Hassan 金関 寿夫 千野 栄一 安東 伸介 北條 文緒	ウィスコンシン大学 ミルウォーキー校教授 駒澤大学教授 東京外国語大学教授 慶應義塾大学教授 本学教授	
1988	「生涯発達と家族 —危機を支える家族・危機をもたらす家族—」	心理学		59号
	乳児の発達と家族—乳児は見ている— 子どもの問題行動と家族ダイナミクス —子どもの叛乱のサイン— 家族の中の高齢者・家族の外の高齢者 青年の危機と家族—キャンパス症候群の陰に—	小林 登 稲村 博 詫摩 武俊 無藤 清子	国立小児病院院長 筑波大学助教授 東京都立大学教授 東京大学学生相談所所員	
1989	「常識への疑問」	哲学		64号
	哲学と学芸—哲学史再考— 写真モデルの認識観への批判 痛化する常識 運命を聴く	坂部 恵 廣松 渉 大森 荘蔵 井上 忠	東京大学教授 東京大学教授 東京大学名誉教授 日本大学教授・東京大学 名誉教授	
1990	「数学らしくない新しい数学—現代数学の一動向—」	数学		67号
	ファジィ理論をめぐって 複素力学系とフラクタル カオスとフラクタルをめぐって 数学と情報科学の間で—“計算”を中心に—	向殿 政男 宇敷 重広 山口 昌哉 廣瀬 健	明治大学教授 京都大学助教授 龍谷大学教授 早稲田大学教授	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属/肩書	学会ニュース掲載号数
1991	「揺れる家族の肖像—世界の女性と家族—」 今、ディックとジェーンの家族は—アメリカの夢と共同体— フランスの親子と子育て—日本と比較しながら— 経済の発展と女性と家族—ドイツの女性問題と関連して— 親の子と子の親と—李朝文学と近松に見る— 東アジアの主婦たち—女性の社会進出の行方を占う—	外国語 荒 このみ 有地 亨 暉峻 淑子 明 眞淑 瀬地山 角	津田塾大学教授 聖心女子大学教授 埼玉大学教授 実践女子大学院生 東京大学大学院生	72号
1992	「21世紀に向かう私たちのからだ」 こどものからだは今 老いるからだ—健やかに生きる— エイズとは何か—そのメカニズムと現状— 今、なぜ東洋医学か—気の世界—	保健体育 正木 健雄 柴田 博 根岸 昌功 湯浅 泰雄	日本体育大学教授 東京都老人総合研究所 地域保健研究部長 東京都立駒込病院 感染症科医長 桜美林大学教授	76号
1993	「激動の世界史—ボーダーレス時代と諸民族—」 ナショナリズム・イスラム・民主主義 国民国家の終焉の時代と日本国憲法の行方 在日外国人と国籍・国境 北アイルランド問題 —分割された国土、引き裂かれた民族— 何故オランダ人女性が慰安婦にされたのか —太平洋戦争末期民間人抑留所について—	史学 山内 昌之 色川 大吉 田中 宏 上野 格 内海 愛子	東京大学教授 東京経済大学教授 一橋大学教授 成城大学教授 恵泉女学園大学教授	82号
1994	「いま『源氏物語』をどう読むか」 文献としての源氏物語—和辻論文の視座から— 異文化の超克—「源氏物語」のフランス語訳— 声をあげる老者たち—源氏物語をひらくもの— 帝王の犯し—源氏物語の表層と深層— 「源氏物語」現代語訳の方法—三度目の挑戦から—	日本文学 鈴木日出男 中山 眞彦 永井 和子 小林 茂美 秋山 虔	東京大学教授 本学教授 学習院女子短期大学教授 國學院大学教授 東京大学名誉教授	88号
1995	「女と男のかんけい学—家族のゆらぎの中で—」 脳の科学からみた女と男 サルからヒトへ—父性の登場— ヘヤー・インディアンの家族とジェンダー 「安らぎ家族」の危うさ—母性神話を問う— 女と男の未来—ファミリー・アイデンティティのゆらぎ—	社会学 養老 孟司 山極 寿一 原 ひろ子 大日向雅美 上野千鶴子	元東京大学教授 京都大学霊長類研究所助手 お茶の水女子大学教授 恵泉女学園大学教授 東京大学教授	92号
1996	「光と物質・生命」 もし、この光がなかったら 光が活躍する 光化学の世界 光と生命 X線と文化財	自然科学・ 情報処理 江沢 洋 藤嶋 昭 徳丸 克己 武部 啓 森田 恒之	学習院大学教授 東京大学教授 筑波大学名誉教授 京都大学教授 国立民族学博物館教授	98号
1997	「新しい文化の解法—言語・文学研究の現場から—」 古いヴィジュアルなんて、ない ヴァーチャル・リアリズム—文学の地殻変動— 社会変化に伴う言語の変容 ニュー・エキゾティシズム	英米文学 高山 宏 佐藤 良明 大角 翠 巽 孝之	東京都立大学教授 東京大学教授 本学教授 慶應義塾大学教授	103号

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属／肩書	学会ニュース掲載号数
	美しい男性が好きですか？ —フェミニズム文化批評と美男論—	浜名 恵美	立教女学院短期大学教授	
1998	『『カルト』と若者』	心理学		108号
	「カルト」とは何か—その特質と背景— 破壊的カルトのマインド・コントロール オウムと若者 「カルト」と法律	浅見 定雄 西田 公昭 江川 紹子 紀藤 正樹	東北学院大学教授 静岡県立大学専任講師 ジャーナリスト 弁護士	
1999	「ことばの生命—消えゆくことば・生まれ出ずることば—」	言語文化		114号
	言語が消える—台湾原住民平埔族の言語— 沖縄の方言と標準語教育 ケセン語のルネッサンス 新しい日本語の誕生	土田 滋 外間 守善 山浦 玄嗣 井上 史雄	元順益台湾原住民博物館館長 沖縄学研究所所長 山浦医院院長 東京外国語大学教授	
2000	「人間学—歴史・思想・聖書—」	哲学		118号
	人間の「生」と「死」 聖書の人間観—エレミヤ書の脇役たち— キリスト教と仏教の対話における人間観 人格的主体の確立 —新渡戸稲造と妻メリーの女子人間形成論を中心に—	柏木 哲夫 小泉 仰 八木 誠一 湊 晶子	大阪大学教授 慶應義塾大学名誉教授 桐蔭横浜大学教授 本学教授	
2001	「身体と運動の今—21世紀を迎えて—」	健康・運動科学		123号
	現代の身体事情—悲鳴をあげる身体— 身体と運動—身体がいのちと脳をはぐくむ— 歩きながら考える—直立猿人的— 動きの感覚の鋭敏化—身体の緊張と弛緩— 「21世紀のオルガンとその音楽—新しい可能性を求めて—」	鷲田 清一 跡見 順子 長崎 浩 星野 公夫	大阪大学大学院教授 東京大学大学院教授 東北文化学園大学教授 順天堂大学教授	
	オルガンの流れの中の日本のオルガン製作 オルガンが日本の楽器であるためには	音楽		124号
	オルガンの流れの中の日本のオルガン製作 オルガンが日本の楽器であるためには	須藤 宏 酒井多賀志	オルガン作家 東京純心女子大学教授	
2002	「異文化の共存と交流—イスラームの文化と歴史—」	史学		129号
	エルサレム住民における隣り合わせの記憶 多文化共存社会とイラン —文化摩擦と文化融合のあいだ— 東南アジア・ムスリムの多元社会論 新疆と中央アジア—イスラームをめぐる— エドワード・W・サイードとパレスチナ人のアイデンティティ	藤田 進 八尾師 誠 山本 博之 梅村 坦 中野真紀子	東京外国語大学教授・同大学海外事情研究所長 東京外国語大学教授 東京大学大学院助手 中央大学教授 翻訳業	
2003	「広告は何を伝えて来たのか？ —広告に見るメディアの戦後史—」	コミュニケーション		133号
	成長から成熟への70年代後半～80年代 —大衆バブルに踊り、パーソナル妄想に惑わされて— ラジオがニューメディアだったころ —1920年代ラジオ広告のメディア史— 太陽に愛されよう—広告から女性へのメッセージ— ユーモア広告の心理学 —広告のユーモア表現と説得効果— 広告に登場した怪しげな商品たち —広告の持つ欺瞞性と表現レトリック—	伊藤 洋子 水越 伸 兼高 聖雄 李 津娥 正木 鞆彦	東海大学教授 東京大学助教授 尚美学園大学助教授 本学助教授 メディア評論家	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属／肩書	学会ニュース掲載号数
2004	「翻訳の現場から」	外国語		139号
	ページからステージへ—シェイクスピア戯曲の翻訳— 『ファウスト』と翻訳 境界に住まう—「フランス語文学」の翻訳— 通訳に求められるもの 中国現代文学の翻訳—魯迅・張愛玲を中心に—	松岡 和子 柴田 翔 星 埜 守之 矢野百合子 丸尾 常喜	翻訳家・演劇評論家 共立女子大学教授 白百合女子大学教授 本学非常勤講師 大東文化大学教授	
2005	「芸能と日本文学」	日本文学		144号
	古典文学の中の「遊び」—笛は横笛、弾くものは琵琶— ※ 演奏 演劇としての「近松」 —「曾根崎心中」を弾いてみると— 能・狂言は中世の現代劇 歌舞伎のはじまり 近代演劇における対話	石田百合子 石川 高 中村かほる 中村 仁美 八木 千暁 野澤 錦糸 西野 春雄 近藤 瑞男 平田オリザ	白百合女子大学非常勤講師 文楽三味線方 法政大学能楽研究所所長 共立女子大学教授 劇作家	
2006	「社会と数学」	数 学		149号
	暗号と数学— ネット社会を支える数学— 金融と数学のかかわり 数学・論理・モデル—ソフトな数学— 学力低下問題とは何だったのか	岡本 龍明 藤田 岳彦 野田 夏子 戸瀬 信之	NTT 情報流通プラットフォーム 研究所 R & D フェロー 一橋大学大学院教授 NEC システム基盤ソフト ウェア開発本部主任 慶應義塾大学教授	
2007	「新しい時代の学校と博物館を考える」	教育学・ 博物館学		156号
	子どものトラウマと心のケア 昨今の博物館事情とこれからの博物館 現代に求められる「リテラシー」 —文章の記憶・理解から表現まで— 教員免許更新制を考える —いま、なぜ教育改革なのか?—	藤森 和美 福島 正樹 深谷 優子 佐久間亜紀	武蔵野大学教授 長野県立歴史館 専門主事兼学芸員 東北大学准教授 上越教育大学准教授	
2008	「ジェンダーからみた国際関係—新世界の発見—」	地域文化		161号
	植民地支配とジェンダー —太平洋諸島サモアの事例から— アフリカの民主化とジェンダー ネオナショナリズムとジェンダー 日本の軍隊・戦争と男性性 平和構築とジェンダー	山本 真鳥 富永智津子 上野千鶴子 大日方純夫 竹中 千春	法政大学教授 宮城女学院大学教授 東京大学大学院教授 早稲田大学教授 立教大学教授	
2009	「21世紀の文学・文化研究の地平—挑戦と展望—」	英語文学文化		167号
	文学を通して、世界中に目を ステラ・ダラス—メロドラマのテクニカル変遷— ハシムラ東郷—他者を語る／他者で語る— 文学研究と表象文化理解の方法論 —近現代文学の語りと感性、メタファーとメッセージ— 言語研究のおもしろさ —〈ことば〉を生み出す〈こころ〉の働きを探る—	富山太佳夫 斉藤 綾子 宇沢 美子 原田 範行 池上 嘉彦	青山学院大学教授 明治学院大学教授 慶應義塾大学教授 東京女子大学教授 昭和女子大学特任教授	

▼校地：牟礼

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会 ・講師	所属／肩書	学会ニュース 掲載号数
短期大学部				
1966	〈学会主催講演会〉 批評と評伝 科学的思考 欧米における日本文学 現代の家族	佐伯 彰一 八杉 竜一 笹渕 友一 松原 治郎	東京都立大学助教授 東京工業大学教授 本学教授 東京大学助教授	
1967	一般意味論と言語生活 近代文学とは何か 現代史の方向 アラスカ・エスキモーの生活 ペルセポリスの遺跡を訪ねて	斉藤美津子 平井 啓之 斉藤 孝 蒲生 正男 三笠宮崇仁	国際基督教大学助教授 東京大学助教授 東京大学助教授 明治大学教授 本学講師	
1968	ソヴィエト・ピューリタニズムの変貌 言葉と心 現代詩の意味 スタンダールの手紙	岩間 徹 永野 重史 中桐 雅夫 大島 真木	本学教授 国立教育研究所 詩人 本学専任講師	
1970	「現代人の諸問題」 結婚前に知っておきたい遺伝病のからくり 経済発展と公害 日本における近代批評の成立 組織の中の人間心理	外村 晶 村松 安子 吉田 熙生 太田垣瑞一郎	東京医科歯科大学教授 本学専任講師 本学助教授 慶應義塾大学教授	
1971	「人間と環境」 人間にとって生産とは何か—現代芸術論の立場から— 人間と自然環境—生態学の立場から— 日本人と生活環境—都市問題を中心に— 適応と変革—人間と猿の比較を通じて—	片岡 啓治 沼田 真 古屋野正伍 岡野 恒也	評論家 千葉大学教授 本学教授 明星大学助教授	
1972	「日本人を探る」 自然へのアプローチ—西洋と日本— 70年代の日本社会 「ことば」について—外国文化との接触を例として— 心理的要因と民族性—日本人の場合—	渡辺 正雄 北川 隆吉 川本 茂雄 藤永 保	東京大学教授 法政大学教授 早稲田大学教授 お茶の水女子大学教授	
1973	「自然と人生」 北欧北米の自然と人生 旅の精神史—近代の日本人と旅— 言語と文化の起源 意識と自然	館脇 操 芳賀 徹 香原 志勢 饗庭 孝男	北海道大学名誉教授 東京大学助教授 立教大学教授 青山学院大学教授	
1974	「表現の諸相—音楽・演劇・言語を通して—」 音楽における表現—モーツァルトを例に— 私の上を通りすぎた新劇 —テアトル・コメディの表現— 表現と思考	海老沢 敏 長岡 輝子 室 勝	国立音楽大学教授 俳優 早稲田大学教授	

年度	共通テーマ ・ テーマ	企画担当部会 ・ 講師	所属／肩書	学会ニュース 掲載号数
	* 討論会			
1975	「自己との闘い—創造行為を通して」			4号
	根本 進 野村 万之丞 織田 幹雄 桶谷 秀昭 *映画 「能・狂言」	根本 進 野村万之丞 織田 幹雄 桶谷 秀昭	漫画家 狂言師、能楽師 元陸上競技オリンピック 選手 文芸評論家	
1976	「公害と遺伝」			8号
	遺伝学からみた人間の未来 環境汚染と遺伝 生存の論理と倫理 日本における公害の現状	福田 一郎 賀田 恒夫 鳥山 英雄 飯島 伸子	本学教授 国立遺伝学研究所部長 本学教授 東京大学助手	
1977				12号
	盲聾児の教育 現代女流作家と女性の生き方 Language Thought and Culture 現代イタリアの社会と文化	井上 早苗 小塩トシ子 John Condon Irene Iarocci	青山学院大学 フェリス女学院大学 東京大学	
1978				
	The Art of Poetry ドライバーの認知と行動 Exploring Literature through James Joyce 卓球と世界旅行 *講演と実演 〈単独講演として〉	Cid Corman 野口 薫 Roger Gerald Matthews 荻村伊智朗	詩人 千葉大学助教授 国際基督教大学準教授 元卓球選手	16号
	幸田 弘子の一葉の世界—十三夜を中心に— 霊長類の行動研究	幸田 弘子 糸魚川直祐	女優 大阪大学助教授	
1979				19号
	文学と生活 ディケンズ文学の魅力 キリスト教と英文学 荒野のアメリカ文化	岡松 和夫 小池 滋 斎藤 和明 亀井 俊介	関東学院女子短期大学教授 東京都立大学助教授 国際基督教大学準教授 東京大学助教授	
1980	「国際文化と日本文化」			24号
	変遷する国際関係 源氏物語と世界文学 チェコスロバキアの歴史と現状 ディケンズ文学の朗読 *朗読	Byron S.J. Weng Kenneth L. Richard Gelbič Stuart Atkins, Michael Bannard	香港中文大学 政治・行政系主任 カナダ・トロント大学準 教授 チェコスロバキア社会主 義連邦共和国大使館 アルビオン座 劇団員	
1981	「英米文学入門」			28号
	ディケンズの短篇小説 ワーズワスと湖水地方	Deborah Thomas Peter Milward	Villanova 大学 助教授 上智大学教授	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会・講師	所属／肩書	学会ニュース掲載号数
	「自伝」とアメリカ文学 エズラ・パウンドと日本文学	佐伯 彰一 Richard Spear	東京大学大学教授 本学非常勤講師	
1982	「日本と中国の接点」			32号
	中国残留孤児にみる日中両国文化の差異 超大国、中国を見抜くために シルクロードを取材して 日本の近代と中国の近代 —日中文学者の交流をめぐって—	西条 正 豊原 兼一 田川 純三 伊藤 虎丸	津田塾大学講師 NHK解説委員 NHK番組制作局 チーフディレクター 本学教授	
1983	「コミュニケーションをめぐる諸問題」			35号
	ことばによるコミュニケーション 人類学からみたコミュニケーション 親子間の「コミュニケーション」 —日本とアメリカの場合— 異文化間コミュニケーションの問題点	野元 菊雄 香原 志勢 柏木 恵子 川竹 和夫	国立国語研究所所長 立教大学教授 本学教授 本学教授	
1984	「女性の自立」			39号
	結婚・離婚 女子教育の現状 職業につく 家庭の中で 女性と老後 女性と平和	渥美 雅子 藤井 治枝 金城 清子 田中喜美子 島田とみ子 三輪 妙子	弁護士 婦人問題評論家 東京家政大学教授 『わいふ』編集長 東海大学教授 フリーライター	
1985	「英米文学の背景」	英語科		43号
	Backgrounds to Canadian Literature: The Journey through Outer and Inner Landscape 文学と聖書 イギリス推理小説の社会的背景 マザー・グースの世界	Margaret Joan Chard 新井 明 小池 滋 平野 敬一	元恵泉女学園短期大学助教授 日本女子大学教授 東京都立大学教授 明治大学教授	
1986	「女子学生の“いま”と“これから”」			48号
	わたしはどのような教育をうけてきたのか 職業につく 国際化の中で いま、平和を考える	藤井 治枝 堀場 宏子 デレウゼ・好子 綿貫 礼子	婦人問題評論家 社員教育コンサルタント “国際結婚を考える会” 関東支部長 環境問題研究家	
1987	「翻訳について考える」	英語科		53号
	翻訳の流れ 翻訳の一視点—言葉と文化— 映画・演劇の翻訳について—その面白さと難しさ— 翻訳のむずかしさ Patterns of Language —Patterns of Mind	板坂 元 小林 祐子 磯村 愛子 別宮 貞徳 Robert J. Wargo	創価女子短期大学教授 本学教授 翻訳家 上智大学教授 『P.H.PIntersect』編集長	
現代文化学部				
1988	「生きたことば」	地域文化		60号
	語り伝えるもの—民話と民衆—	山口 崇	俳優	

年度	共通テーマ・テーマ	企画担当部会 ・講師	所属／肩書	学会ニュース 掲載号数
	あなたが語る“愛のセリフ” ことばとあそぶ *講演と朗読 死んだ文字の対極にある〈ことば〉—音楽— *講演とギター演奏 個の〈ことば〉・群れの〈ことば〉	清水 邦夫 伊藤 惣一 兼古 隆雄 如月 小春	劇作家 俳優 ギタリスト 演出家	
1989	「文化を語ることば」	言語文化		65号
	源氏物語のことば—日本の思考について— シェークスピアのことば スコットランドの詩とことば 子どものことばと詩のことば 作品のこころを伝える〈ことば〉—樋口一葉「十三夜」 をよむ—	秋山 虔 小田島雄志 テッサ・ラン ズフォード 池上 嘉彦 幸田 弘子	本学教授 東京大学教授 詩人 東京大学教授 女優	
1990	「マスメディアの現在と未来」	コミュニ ケーション		69号
	メディアの近未来—マルチ・メディアを中心に— マスメディアと女性 テレビのある風景 ジャーナリズムの行方	斎藤 嘉博 堂本 暁子 天野 祐吉 原 寿雄	武蔵野美術大学教授 参議院議員・元TBS報 道部 コラムニスト・『広告批 評』前編集長 共同通信社社長	
1991	「日本の美」	地域文化		74号
	日本美術の四季—日本美術の一つの見方— 落語の美学 能の美学 日本の美意識の自立	河合 正朝 延広 真治 松岡 心平 秋山 虔	慶應義塾大学教授 東京大学教授 東京大学教授 本学教授	
1992	「人間にとって言語とは何か」	言語文化		79号
	乳児のコミュニケーションの初期発達 言語の障害—失語症を中心に— 言語獲得と人間的環境—養育放棄の事例から— 言語起源論とその哲学的意味	正高 信男 笹沼 澄子 藤永 保 坂本 百大	東京大学教授 東京都老人総合研究所 国際基督教大学教授 青山学院大学教授	
1993	「国際化とコミュニケーション」	コミュニ ケーション		84号
	国際交流研究の視点から 政治の国際化の視点から ジャーナリストの視点から テレビ番組研究の視点から	手塚千鶴子 黒宮 時代 下村 満子 原 由美子	慶應義塾大学助教授 トキヨ・アソシエーツ 代表取締役 朝日新聞編集委員 NHK放送文化研究所研 究員	
1994	「今、中国を語る」	地域文化		89号
	日中の障壁 海峡両岸関係の現段階 ポスト冷戦期の中国外交 中国政治は、今	横山 宏章 森山 昭郎 国分 良成 天児 慧	明治学院大学教授 本学教授 慶應義塾大学教授 青山学院大学教授	

その他の講演会等リスト

▼学会関係講演会

年度	題 目	講 師	所属／肩書	備 考
1950	ゲーテの畏敬	小宮 豊隆	本学客員教授	学会発会式 記念講演
1950	世界平和の経済的基礎	赤松 要	本学講師	学会発会式 記念講演
1950	化学療法について	平野 四郎	本学教授	学会発会式 記念講演
1950	新生に於けるダンテ	石原 謙	本学客員教授	
1950	米文学研究の方法	西川 正身	本学講師	
1950	経済科学としての社会科学と経済分析	高橋長太郎	本学講師	
1954	科学と世界文化	湯川 秀樹	京都大学教授	学術講演会 会長 高木貞二氏の学長就任記念講演
1954	アウグスチヌスの『神の国』について	石原 謙	本学名誉学長	学術講演会 宗教部共催 アウグスチヌス1600年記念講演に学会年次大会の一部として
1955	日本の経済と労働	中山伊知郎	一橋大学教授	学術講演会 宗教部共催
1958	発達初期の経験が成熟期の行動におよぼす影響について —実験心理学的研究—	白井 常	本学教授	創立40周年記念学術講演
1958	近代および現代フランス文学にあらわれた青年の課題	片岡 美智	法政大学講師	創立40周年記念学術講演
1958	インカの遺跡について	三笠宮崇仁	本学講師	創立40周年記念学術講演
1968	今日における学問の自由の意義	鵜飼 信成	成蹊大学教授	創立50周年記念学術講演
1968	がんの個性	古田 富三	財団法人癌研究所長・ 東京大学名誉教授	創立50周年記念学術講演
1969	意味と虚構—コトバの働きを考える	室 勝	早稲田大学助教授	
1969	ラテン・アメリカの現状と問題点	加茂 雄三	ラテンアメリカ協会 研究主任	
1972	言語の普遍性—言語学的立場から—	Irwin Howard	ハワイ大学助教授	心理学部会主催、 学会・比較文化研究所後援
1972	言語の相対性—心理学的立場から—	Agnes M. Niyekawa- Howard	ハワイ大学教授	心理学部会主催、 学会・比較文化研究所後援
1974	新中国を訪ねて—女性科学者として—	島 美喜子	本学教授	
1974	ロマネスク美術の旅	小佐井伸二	青山学院大学助教授	独仏語研究室主催、学会後援
1975	魔鏡—明治科学史のエピソード *映画と講演	渡辺 正雄	東京大学教授	
1975	朝鮮民主主義人民共和国を訪ねて	高橋幸八郎	東京大学名誉教授	
1975	ネパールの自然と人間 *ネパール学術調査報告			* 於 文理学部・短期学部 各一回
	ネパールの植物的自然	福田 一郎	本学教授	
	ヒマラヤの栽培植物	阪本 寧男	京都大学助教授	
	ネパールのむらと人間	山本 英治	本学教授	
	カトマンズの祭り和生活	古屋野正伍 渡辺 雅子	東京都立大学教授、 大学院	
	ネパールの人口問題 *映画： ヒマラヤの少年 (学術調査隊制作)	宮川 実	本学教授	
1976	ベートーヴェン・ピアノソナタ演奏会 *ピアノコンサート	山根弥生子	洗足学園大学教授	* 於 文理学部・短期学部 各一回
1978	ブータンの文化と生活 *映画： Bhutan - Land of the Peaceful Dragon-	Sonam Dhendub Tshering	ブータン政府観光局職員 (Administrative Officer)	東京女子大学ネパール研究会 協力 * 於 短期大学部
1978	科学と社会、科学者コミュニティの形成	伏見 康治	日本学術会議会長	
1978	アメリカ社会の現況とアメリカ社会学の動向	ハリー・カネ ハル・ニシオ	トロント大学教授	

年度	題 目	講 師	所 属 / 肩 書	備 考
1984	ネパールの栽培植物と人間生活 *ネパール学術調査報告			
	ネパールの自然と社会	福田 一郎 山本 英治	本学 本学	
	栽培植物とその利用 (イネ・ムギ類 / 雑穀 / 香辛料その他)	小西 猛郎 木俣美樹男 福田 一郎	岡山大学農業生物研究所、東京学芸大学、本学	
	むらと生活 食生活と栄養	山本 英治 里 和宏	本学 国立東京第2病院	
1985	雲南少数民族の文化と生活	黄 惠焜	中国雲南民俗学院 雲南民族研究所訪日団 団長・ 中国民族学会副会長	
1991	ヒマラヤ王国ブータン —現存する古代社会の稲作と唐辛子—	山本 英治 福田 一郎 佐藤洋一郎	文部省国際学術研究南 アジア調査隊 本学教 授、本学教授、国立遺伝 学研究所所員	
1996	変わりゆくスウェーデンの福祉	レグラント・ 塚口 淑子	ストックホルム大学研 究員	
1996	中国武術とは何か	張 克儉	武漢体育学院助教授	
1998	家族・結婚・子供の社会史をめぐって —近代ヨーロッパとジェンダー・再考—			読史会主催、 学会・女性学研究所共催
	ヨーロッパ家族史とジェンダー	若尾 祐司	名古屋大学	
	歴史人口学から社会史へ —18世紀末のフランスを中心に—	藤田 苑子	慶應義塾大学	
1998	心臓移植—重症心不全患者をいかに救命するか—	小柳 仁	日本移植学会会長・東京 女子医科大学教授	現代文科学部共通科目委員会・ 学会共催
1999	帝国を問う—ローマ帝国と清帝国をめぐって—	弓削 達 石橋 崇雄	フェリス女学院大学名 誉教授、国士舘大学教授	読史会主催、史学部会・学会 共催
2000	体験と歴史			読史会主催、学会共催
	「少国民」の戦争体験	山中 恒	作家	
	フィリピン在留邦人の戦争の記憶と戦後	早瀬 晋三	大阪市立大学教授	
2000	和解・協力過程に入った南北関係 —南北首脳会談の成果と今後の展望—	康 仁徳	極東問題研究所理事長・ 元韓国統一部長官	東京女子大学学会50周年記念 講演会
2001	いま美術史とは？ シャボン玉の寓意	森 洋子	明治大学教授	読史会主催、学会共催
2002	ハワイ・アメリカ・日本—近代日本研究の50年—	ジョージ・ アキタ	ハワイ大学名誉教授	
2002	パレスチナ問題と聖地エルサレム	平山健太郎	元NHK解説委員	学会・キリスト教センター共催
2002	戦国乱世—自立する地域社会と大名権力の対抗 —統一政権の形成と村落の動向	池上 裕子	成蹊大学教授	読史会主催・学会共催
2002	Literary Genre of Fourth Gospel (第四福音書の文学 的ジャンル) *通訳付	Harold W. Attridge	イエール大学神学部教授	
2002	Outposts of Civilization: Race, Religion and the Formative Years of American-Japanese Relations	Joseph M. Henning	Saint Vincent College 準教授	
2003	歴史認識から自己認識へ —近世イギリスにおける国家・帝国・「国土」 —イギリスにおける「国土」の発見	見市 雅俊	中央大学教授	読史会主催・学会共催
2003	映画でとらえる中東 「ガリラヤ」の婚礼 *パレスチナ映画	藤田 進	東京外国語大学教授	東京外国語大学海外事情研 究所主催開放講座 学会・史学科共催
2003	私はいかにして作家になったか *通訳：野崎 欽	Jean- Philippe Toussaint	作家	

年度	題 目	講 師	所属／肩書	備 考
2004	七十人訳ギリシア語聖書をめぐる講演会			
	七十人訳ギリシア語聖書と最初の近代語訳 — トムスン訳の意義 —	秦 剛平	多摩美術大学教授	
	わたしと七十人訳とのかかわり	村岡 崇光	オランダ・ライデン大学 名誉教授	

▼フォーラム・シンポジウム

学会フォーラム				
年度	題 目	発題者	所属／肩書	備 考
1955	東京女子大学の立場と方向—本学諸学科の研究交流と学界—	柳父徳太郎 (進行係)	本学教授	
		小泉 一郎	本学教授	
		宮本信之助	本学助教授	
		金子 栄一	本学助教授	
		大川 信明	本学助教授	
		多羅尾四郎	本学教授	
1955	東京女子大学の学問的立場とその方向	宮本武之助	本学兼任教授	
		笹淵 友一	本学教授	
		柳父徳太郎	本学教授	
		宮本信之助 (進行係)	本学助教授	
シンポジウム				
年度	題 目	発題者	所属／肩書	備 考
1958	日本文化の現状	岩間 徹	本学教授	
		森岡 健	本学助教授	
1958	本学学生調査から見た学内の諸問題について	藤永 保	本学講師	
1959	「組織の中の人間」(W. H. ホワイト著)を中心として	藤永 保	本学助教授	
1960	日本の近代化	松村 緑	本学教授	
		伊藤 善市	本学助教授	
		宇野 脩平	本学助教授	
1960	キリスト教主義大学における宗教と教育	松川 成夫	本学助教授	
		蓮見 音彦	本学講師	
1960	一般教育の問題	玉虫 文一	本学教授	
		新井 浩	本学教授	
2008	経済で現代社会を考える	中条 潮	慶應義塾大学教授	公開シンポジウム 社会学部企画
		廻 洋子	淑徳大学教授	
		二村真理子	愛知大学准教授	
		竹内 健蔵	本学教授	
		栗田 啓子	本学教授	

▼コロキウム(教職員相互の合同研究発表会)

年度	題 目	発表者	所属／肩書	備 考
1955	第1回 『米と人口と歴史』を中心として	大森 志郎	本学教授	
1956	第2回 ワーズワース研究を通して	加納 秀夫	本学教授	
1956	第3回 魏志倭人伝の研究	大森 志郎	本学教授	
1957	第4回 マックス・ウェーバーの研究について	金子 栄一	本学助教授	
1957	第5回 文学界を焦点とする浪漫主義文学の研究	笹淵 友一	本学教授	
1957	第6回 「薄田泣菫」について	松村 緑	本学教授	
1957	第6回 狂言の研究について	古川 久	本学教授	
1959	第7回 予測に関する統計理論	小河原正巳	本学教授	

年度	題 目	発表者	所属／肩書	備 考
1959	第8回 オジギソウに関する研究について —植物の被刺激性をめぐって	鳥山 英雄	本学助教授	
1960	第9回 『国際関係と経済倫理』について	柳父徳太郎	本学教授	
1961	第10回 ロシア革命とソビエト連邦の成立	岩間 徹	本学教授	
1961	第10回 クロムウェル	今井 宏	本学助教授	
1961	第11回 函数空間の上の作用素の積分表示	和田 淳蔵	本学助教授	
1961	第12回 英国における熱理論の発展	渡辺 正雄	本学教授	
1961	第13回 弁別学習における移調の問題	白井 常	本学教授	
1962	第15回 エンレイソウの集団遺伝学	福田 一郎	本学助手	
1962	第14回 地域開発の諸問題	伊藤 善市	本学助教授	

学術交流会リスト

開催回数	年月日	テ ー マ	参加者	肩 書	学会ニュース掲載号数
第1回	2002. 12. 3	「日本近代再考」			
		戦後日本の近代史認識	黒沢 文貴	本学教授	
		近代をめぐる韓国史学史	兼若 逸之	本学教授	
		近代日本における「競争と教育」の思想	雨田 英一	本学教授	
第2回	2004. 1. 16	「リベラル・アーツ教育について」			
		「教養教育」の当面する課題—リベラル・アーツ教育、一般教育、そしてカリキュラム—	寺崎 昌男	東京大学名誉教授・立教学院本部調査役	
		リベラル・アーツ教育の経験から	川崎 典子	本学教授	
		リベラル・アーツは大学と社会をむすぶ絆	佐々木涼子	本学助教授	
		公共的良識人とリベラル・アーツ教育—男女共生社会の基礎をつくる—	湊 晶子	本学学長	
第3回	2005. 2. 15	「歴史と文学に見る女性」			
		古代ローマの追悼演説に見る女性の地位とジェンダー	樋脇 博敏	本学助教授	
		大伴坂上郎女をめぐって	鉄野 昌弘	本学教授	
		フランス文学に描かれた女性と日本の作家	大島 眞木	本学教授	
第4回	2005. 12. 6	「時間と空間の科学」			
		〈いつ〉と〈どこ〉のコスモロジー	佐々木能章	本学教授	
		時空とエネルギー	矢崎 紘一	本学教授	
第5回	2007. 1. 18	「女子高等教育の歴史と未来」			153号
		明治女学校がめざしたもの、遺したもの	中村 直子	本学助教	
		アメリカの女子大学と日本の女子大学—歴史的視点から—	小檜山ルイ	本学教授	
第6回	2008. 1. 16	「21世紀のリベラル・アーツ教育とは何か」			159号
		リベラルということ—自由学芸の起源—	森 一郎	本学教授	
		グローバル化時代の大学教育—アメリカの大学及びICUの教養教育を中心に—	藤田 英典	国際基督教大学教授	

第6回	2008. 1. 16	「教養教育」の思想と課題	竹内 久顕	本学教授	
		東京女子大学におけるリベラル・アーツとキャリア教育	今村 楯夫	本学教授	
第7回	2009. 1. 14	「学生の自己表現を育む—学内の実践に即して—」			165号
		協働と対話による主体性の確立：日本教育の立場から	石井恵理子	本学教授	
		実習授業からみた学生の身体知	横沢喜久子	本学教授	
		自己表現の場・合唱の視点から	中内 潔	本学教授	
		こころ語りによる自己表現	高島 克子	本学教授	
第8回	2010. 1. 19	「学会 60年の活動とリベラル・アーツ教育」			
		「学校」化しつつある大学における教育と研究	塚本 三夫	中央大学教授	
		学会活動は面白い	本合 陽	本学教授	
		学会に期待すること	大隅 和雄	本学名誉教授	

学生研究奨励費グループリスト

A = 一般研究 B = 刊行助成 I = 前期募集 II = 後期募集

交付年度	テ ー マ
1973-II A	幼稚園期の言語発達
1973-II A	コホウテク彗星研究
1973-II A	数学思想の研究
1973-II A	『甲州秋山の民俗』の刊行
1974-I A	現代芸術における宗教性 — W. カイザー『グロテスクなもの』を中心として—
1974-I A	萩原朔太郎研究
1974-I A	現代作家とその作品 岡本かの子一人と文学—
1974-I A	『富士東麓の民俗』の刊行
1974-II A	幼稚園期の言語発達
1975-I A	鹿島における労働力移動とその再編成
1975-I A	ベトナム 1975
1975-I A	『普賢堂の民俗』の刊行
1975-II A	芸術のジャンル—その個別性と共通性—
1975-II A	シロネズミの位置選択についての基礎的実験
1975-II A	泉鏡花研究
1975-II A	夏目漱石研究論
1976-I A	美的体験における自然
1976-I A	都市研究における中範囲理論の試み —鉄鋼都市釜石の構造分析—
1976-I A	幼児の認知構造と描画行動についての—考察
1976-I A	シロネズミの出産・母性行動・仔の成長の観察と記録撮影
1976-II B	『雄勝役内の民俗』の刊行
1977-I A	英語を中心とする音韻の研究
1977-I A	芸術における宗教性
1977-I A	計算機による言語処理の研究
1977-I A	アメリカ文学—植民地時代から現代まで—
1977-I A	大学移転を契機とする地域社会の変化

交付年度	テ ー マ
1977-I A	アジアの社会と文化—ネパールと日本の比較研究—
1977-I A	近世山村の村落構造分析
1977-I A	マウスにおけるテリトリー形成
1977-I A	英国チューダー朝の音楽とその周辺 —シェイクスピア劇における音楽について—
1977-II A	仏像を通して見た日本人の信仰の諸相
1977-II A	『出雲の国風土記』と出雲神話
1978-I A	ユング心理学研究—集合的無意識と昔話について—
1978-I A	芸術と社会
1978-II A	絵画と文学
1978-II A	近世山村の村落分析
1978-II A	日本語文章の再認に関する実験
1978-II A	芸術様式の変遷
1978-II A	近代作家の小説における冒頭部の類型研究
1979-I A	芸術における技術—技術美について—
1979-I A	Acos6 による SNOBOL4 の benchmark
1979-I A	アジアの近代—近代への視点—
1979-I A	ネパールの人と文化—婚姻形態をめぐって—
1979-I A	継体・安閑・宣化紀の問題点について
1979-I A	荘園発達史よりみた中世の展開の考察
1979-I A	数学の模型—具体性を持った数学—
1979-I A	チャールズ・ディケンズの小説とその社会的背景 —『オリヴァー・ツイスト』—
1979-I A	堀辰雄の作品研究 自然の意味するもの —『風立ちぬ』を素材として—
1979-I A	自殺—心理とそこに潜む死生観—
1979-I A	我が国における葬制の研究
1979-I A	美学史と現代美学
1979-I A	近世山村の村落構造分析
1979-I A	中国の国民性
1980-I A	美学と現象学
1980-I A	アメリカにおける女子高等教育の現状
1980-I A	ロレンスとヘミングウェイ —“darkness”から本質への考察—
1980-I A	『日本書紀』欽明天皇条の諸問題の研究
1980-I A	室町時代における宗教教団の成立過程について
1980-I A	近世農村の構造分析
1980-I A	東京女子大学学生のキリスト教に対する意識調査
1980-I A	生態学—人間と環境の全体性の研究—
1980-I A	芸術作品の成立
1980-I A	明治維新における行動と思想
1980-II A	現代日本の生産過程と労働の疎外に関する研究
1980-II A	成績不振者の心理
1980-II A	キーツと西脇順三郎における幸福と永遠
1981-I A	ハイデッガーの存在論
1981-I A	欽明紀より推古紀にいたる諸問題の研究
1981-I A	『沙石集』にみる鎌倉中期の仏教と社会

交付年度	テ ー マ
1981-I A	近世農村の構造分析
1981-I A	イギリス—過去と現在—
1981-I A	女性問題—女性の差別を立体的に観る—
1982-I A	サルトルとその時代
1982-I A	小林秀雄と「本居宣長」
1982-I A	日本文学における幻想について
1982-I A	アジアの中の日本
1982-I A	維新変革と地域社会
1982-I A	「興福寺奏状」をめぐる
1982-I A	日中戦争
1982-I A	飛鳥時代に関する研究
1982-I A	マイコンオルゴールの製作
1982-I A	イギリス児童文学におけるフェアリーおよびフェアリーテイルズの研究
1982-I A	1970年代の日本の政治と外交
1982-I A	「テレビの情報加工の過程」に関する研究
1982-I A	放送大学は何を成し得るか
1982-I A	源氏物語訳の比較研究—現代作家による訳業を中心に—
1983-I A	ファンタジーの哲学的考察
1983-I A	実存主義をめぐる—アウグスティヌスを中心に—
1983-I A	日本古代史における諸問題
1983-I A	地域社会の基礎構造についての研究
1983-I A	近畿地方にみられる祖先祭祀の研究
1983-I A	万葉集に現れた植物の研究
1983-I A	トルキンの『指輪物語』と、ルイスの『ナルニア国物語』の比較
1983-I A	現代における日本人の国際観
1983-II A	類義語の研究
1984-I A	日本近代詩の可能性—白秋・光太郎・朔太郎をめぐる—
1984-I A	メディアと社会
1984-I A	プロレタリア文化革命の研究
1984-I A	古代の地方史—出雲および飛鳥についての歴史地理と文化の研究—
1984-I A	紀北農村の民俗調査
1984-I A	『幸福論』比較
1984-I A	映像化された女子大生イメージの研究
1984-I A	年齢にふさわしい児童図書とは
1984-II A	現代文学のひとつの傾向の分析—吉行淳之介の作品—
1984-II A	パスカル『パンセ』の一考察—神と人間との隔り—
1984-II B	近畿地方村落の民俗調査—和歌山県伊都郡かつらぎ村を例に—
1985-I A	古代日本の植生（自然）と植樹（人工）
1985-I A	マウスおよびラットによる社会的剥奪
1985-I A	現代イギリス女流作家の描く女性像
1985-I A	「マザー・ゲース」の研究
1985-I A	南北問題
1985-I A	芸術環境論—デュボスのミリュール説を中心に—

交付年度	テ ー マ
1985-Ⅱ B	関東地方北東部の民俗調査（蔵持の民俗）
1985-Ⅱ A	近代ヨーロッパにおける理性的認識の歩み
1985-Ⅱ A	1910年代の中国の動向
1986-Ⅰ A	戦後の日中関係
1986-Ⅰ A	古代日本の樹木の研究
1986-Ⅰ A	鎌倉時代史研究
1986-Ⅰ A	ヤマガラのおみくじ引きについての研究
1986-Ⅰ A	対人魅力の規定要因についての検討
1986-Ⅰ A	絵画の具象性
1986-Ⅰ A	ソ連の社会 —チェルノブイリ原発事故に見るソ連の情報政策—
1986-Ⅰ A	井上ひさしの文章の研究
1986-Ⅰ A	原爆投下後の広島市民の食生活について
1986-Ⅰ A	日英比較
1986-Ⅰ A・B	静岡県中部の民俗調査（藤守の民俗）
1987-Ⅰ A	日本の途上国援助の現状と展望
1987-Ⅰ A	受ける側からみた援助—フィリピンの場合—
1987-Ⅰ A	現代社会におけるメディアの役割と責任 —沖縄の場合—
1987-Ⅰ A	日本古代樹木の研究
1987-Ⅰ A・B	三重県四日市市水沢における民俗調査とその民俗誌作成
1987-Ⅱ A	メスマウスにおける隔離飼育による社会経験剝奪の影響
1988-Ⅰ A	漱石の後期評論研究
1988-Ⅰ A	在日朝鮮人の文学
1988-Ⅱ A	学内におけるシジュウカラの繁殖成功率の推定と捕食者であるアオダイショウの補食行動に関する実験的研究
1988-Ⅱ A	マウスにおける隔離飼育の影響 —雌雄出会わせ場面において—
1988-Ⅱ A	大学生の生活と意識
1988-Ⅱ A	翻訳の研究と実習
1988-Ⅱ A	英語語彙の歴史的研究
1988-Ⅱ A	英語の語彙の語源的研究
1988-Ⅱ A	イギリスの社会階級による言語の違い
1988-Ⅱ A・B	福島県西白河郡表郷村番沢における民俗調査とその民俗誌作成
1989-Ⅰ A	紀元1～2世紀キリスト教とギリシャ思想
1989-Ⅰ A	現代俳句の実作と研究
1989-Ⅰ A	中国の体制改革をめぐる諸問題
1989-Ⅰ A	泉鏡花作品研究—『照葉狂言』他—
1989-Ⅰ A	『続日本紀』研究
1989-Ⅰ A	日英語表現比較研究
1989-Ⅱ A	地元意識の地域的、世代間的比較—札幌と東京—
1989-Ⅱ A	熱帯雨林破壊と私たちの生活
1989-Ⅱ A・B	静岡県引佐郡三ヶ日町平山における民俗調査とその民俗誌作成
1990-Ⅰ A	東海道をさぐる—大井川から駿府まで—
1990-Ⅰ A	インドネシア語と民族意識の形成

交付年度	テ ー マ
1990-I A	日英語動詞対照研究
1990-II A	日米教科書の比較—近現代史での日本の扱われ方—
1990-II A・B	栃木県芳賀郡市貝町田野辺の民俗調査および民俗誌の作成
1991-I A	認識論の流れ—カントを中心に—
1991-I A	「坊っちゃん」に見る日本人の心を探る
1991-I A	宮沢賢治『銀河鉄道の夜』研究
1991-I A	Ernest Hemingway <i>The Last Good Country</i> のオリジナル原稿と定本テキストとの比較
1991-I A	続日本紀の講読とその関連事項の研究 —文武期にみられる還俗記事について—
1991-I A	社会心理学研究会
1991-I A	タイ語を母国語とする日本語学習者の誤用分析
1991-I A	社会理論研究
1991-II A・B	三重県名張市黒田における民俗調査と民俗誌作成
1992-I A	高山寺蔵『受法用心集』の本文解説と語彙総索引の作成
1992-I A	信濃追分地方の植物調査
1992-I A	社会学理論研究会
1992-I A	T S W (Toward a Sociology of Women)
1992-I A	資本主義に関する社会科学的理論の研究
1992-I A	「標準語」研究
1992-II A	水谷文法用語集作成
1992-II A	東京女子大学の割箸から環境問題を考える
1992-II A・B	愛知県犬山市今井における民俗調査とその民俗誌作成
1993-I A	好色人としての光源氏
1993-I A	Ernest Hemingway 書簡研究 —Hemingway 文学における現実と虚構—
1993-I A	日本古代史料の研究
1993-I A	大学院における心理学教育カリキュラム体系の比較検討
1993-I A	映画による比較文化
1993-I A	男女雇用機会均等法について
1993-I A	花岡事件学習会
1993-I A・B	山梨県北巨摩郡武川村柳沢における民俗調査とその民俗誌作成
1993-II A	近現代における実体概念の変遷
1993-II A	『歴史の学び方』から学ぶ会
1993-II A	日本社会における子どもの位置—女性の視点から—
1993-II A	マルチメディアを使った新しい表現の可能性についての研究
1994-I A	都市女性の環境問題への取り組み
1994-I A	空間グラフの不変量について
1994-II A	少女漫画の文学性を探る
1994-II A	箱根と文学—近世を中心に—
1994-II A	東京女子大学文理学部・現代文化学部の学部間の相互イメージの研究
1994-II A・B	新潟県中魚沼郡津南町赤沢における民俗調査とその民俗誌作成

交付年度	テ ー マ
1995-I A	東海道探訪—『東海道中膝栗毛』より—
1995-I A	Hemingway の母親の書簡研究—Hemingway 作品における二重の虚構—
1995-I A	Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan by Commodore M. C. Perry における研究
1995-I A	専業主婦の再就職活動の実態
1995-I A	高学歴女性の人生設計 —結婚・出産・性についての母娘の意識調査から—
1995-I A	空間グラフに関する研究
1995-I A	コラツの予想に関わる定理の自動証明の試み
1995-I A	実際のデータを使ったパラメトリック統計分析法の検証と評価
1995-I A	新聞の紙面による発行とインターネットによる発行の報道形態の比較研究
1995-II A	「少女マンガ」と「少女性」—その連繫—
1995-II A	中世歌論書の基礎的研究
1995-II A	金子みすずを中心にした童謡の研究
1995-II A	日本人の食行動に関する研究 —諸外国に与える影響を視野に入れて—
1995-II A	地域言語の変化に関する研究
1995-II A	南北問題におけるNGOと市民の役割について —国際ボランティア貯金にみる市民意識—
1996-I A	日本文学にみる嫉妬
1996-I A	近畿地方の「古道」を歩く
1996-I A	奈良県奈良市大柳生における民俗調査とその民俗誌作成
1996-I A	コンピュータによる一様乱数の発生とその応用
1996-I A	lex と yacc によるコンパイラの作成
1996-I A	交友関係からみた在日バングラデシュ人
1996-I A	アジア研究—アジア諸国と日本—
1996-I B	山口県豊浦郡豊北町角島における民俗調査とその民俗誌作成
1996-II A	少女マンガのモチーフと型—70年代から現在まで—
1996-II A	盲女子高等教育の変遷について
1997-I A	言語における思考形態の特性 —日本語で哲学するとは…—
1997-I A	バングラデッシュと日本 —日本におけるムスリムの生活を通して—
1997-I A	兵庫県加東郡社町上鴨川における民俗調査
1997-I A	アメリカ映画における女性像の変遷
1997-I B	奈良県奈良市大柳生町における民俗調査とその民俗誌作成
1997-II A	盲女子高等教育の変遷について
1997-II A	少女マンガにみる少女たちの恋愛
1997-II A	女性の価値観形成と情報化社会におけるメディアの影響
1997-II A	東アジア食文化研究—韓国のキムチについて—
1997-II A	日本語教育におけるジェンダー

交付年度	テ ー マ
1998-I A	第3世界の特殊教育と開発
1998-I A	戦う少女たちの変遷をたどる—少女マンガ論—
1998-I A	岩手県和賀郡湯田町左草における民俗調査
1998-I A	女子青年の家族関係と孤独感に関する研究
1998-I A	暗号理論とアルゴリズムの研究
1998-I B	兵庫県加東郡社町上鴨川における民俗調査とその民俗誌作成
1998-II A	日中近代美術教育の比較 —天心・フェノロサと蔡元培を中心に—
1998-II A	雑誌の「今」を考える
1999-I A	教科書にみる音楽—唱歌教育への—考察—
1999-I A	島根県八束郡美保関町美保関における民俗調査
1999-I A	アイデンティティの形成と文化—日本の大学生における自己アイデンティティのあり方を探る—
1999-I A	Network Security
1999-I A	Solving Diverse Differential Equations,with a Graphical Calculator TI-89
1999-I B	岩手県和賀郡湯田町左草における民俗調査とその民俗誌作成
1999-II A	戦国期の家訓を読む
1999-II A	韓国新聞広告研究 —東亜日報の一面広告(1994～1999)を中心に—
1999-II A	交通広告の特性に関する研究
1999-II A	インターネットのバナー広告について
2000-I A	奈良県山辺郡都祁村吐山における民俗調査
2000-I A	犯罪報道が少年犯罪に及ぼす影響について
2000-I A	ショッピングバッグが利用者に及ぼす影響と効果
2000-I A	韓国新聞研究—4コママンガを中心に—
2000-I A	オペレーティングシステム理論の研究
2000-I B	島根県八束郡美保関町美保関における民俗調査とその民俗誌作成
2000-II A	ニュース報道内容分析
2001-I A	哲学と政治—知と実践—
2001-I A	滋賀県蒲生郡竜王町綾戸における民俗調査
2001-I B	奈良県山辺郡都祁村吐山における民俗調査とその民俗誌作成
2001-II A	哲学と言語—人間と言葉との関わりについて—
2001-II A	扇面を構成する木型の整理と扇絵の復元
2001-II A	ブラックホールの研究
2001-II A	家族写真を使った女性史の構築
2002-I A	奈良県御所市名柄における民俗調査
2002-I A	女性史の構築・展示
2002-I B	滋賀県蒲生郡竜王町綾戸における民俗調査とその民俗誌作成
2002-II A	Ernest Hemingwayの短編作品における多用される語句と作品テーマとの関わり
2002-II A	扇面を構成する木版の整理と考察
2002-II A	地域公共機関等のユーザビリティ調査、現状把握
2003-I A	貨幣とは何か

交付年度	テ ー マ
2003-I A	佐太神社周辺の民俗調査
2003-I A	家族写真を使った女性史の構築
2003-I A	オセアニア言語の所有表現
2003-I B	奈良県御所市名柄における民俗調査とその民俗誌作成
2003-II B	扇面を構成する木版の整理と扇絵の復元
2004-I A・B	三重県鳥羽市神島の民俗調査とその民俗誌作成
2004-I A	方言生活語彙の調査・研究
2004-I A	太極拳運動の研究
2004-I A	伝承500年の「綾子舞」を通して日本の伝統芸能を考える
2004-I B	Diana Son 作戯曲 <i>STOP KISS</i> の翻訳、出版及びその上演
2004-I B	佐太神社周辺の民俗調査
2004-II A	古今和歌集の在原業平詠歌とその物語化について
2004-II A	会話における女性のことばの変遷
2004-II A	大阪の土産品パッケージからみる都市イメージ
2005-I A	人は死をどのように見つめてきたか、見つめてゆくのか
2005-I A	日本国憲法の研究—ネット世代への問題提起—
2005-I A	江戸の町人文化を探る
2005-I A	「初期万葉」を捉え直す
2005-I A	英語の語彙における統語的及び系列的的研究
2005-I A	日本の芸能と源流を探る
2005-I A	歴史のなかの衣服の変遷と比較—西洋と日本—
2005-I A	ライフコース研究について
2005-I A	セクシャルマイノリティとそこから辿る「多様な性」
2005-I A	愛知万博調査・研究
2005-I A	電車の車内アナウンスの表現に関する研究
2005-I A	性淘汰と性差—人間行動への理解—
2005-I A	十日間で?男を上手に射止める方法~人の心をことばで動かすことは可能か・恋愛の駆け引き術~
2005-I A	方言生活語彙の調査・研究 (第2次調査)
2005-I A	中等教育における授業をめぐる教育課題の明確化と教育実践
2005-I A	古今和歌集の在原業平詠歌とその物語化について
2005-I A	メラネシア地域における言語状況
2005-II A	Willa Cather <i>The Profile</i>
2005-II A	Larry McCaffery "Postmodern and Metafiction"
2006-I A	生涯学習の場としての博物館研究
2006-I A	神田祭研究—江戸の心意気を探る—
2006-I A	歌唱における外国語の発音に関する意識調査
2006-I A	本学図書館蔵『古今和歌集』写本の伝本系統調査ならびに在原業平詠歌の物語化とその享受
2006-II A	雇用における「偽装」問題
2006-II A	香港で働く日本人女性の意識
2006-II A	日本人と愛
2006-II A	「食」からみる韓国

交付年度	テ ー マ
2006-II A・B	「八ッ場ダム」建設地のフィールド調査—時代の変化に伴う地域住民の意識変化とコミュニケーション—
2007-I A	博物館における「学び」の可能性
2007-I A	東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎についての研究 ☆奨励賞受賞
2007-I A	本学図書館蔵『古今和歌集』写本の伝本系統調査ならびに在原業平詠歌の物語化について
2007-I A	アーネスト・ヘミングウェイとマレーネ・ディートリッヒの往復書簡
2007-II A	日本の大学における Critical Thinking 調査・研究
2007-II A	地域商店街活性化に向けた取り組み —木更津市の事例—
2007-II A	東京女子大学における国際協力活動の現状と課題 —本学学生の活動と関心に関する調査を含む—
2008-I A	本学図書館蔵『古今和歌集』の研究
2008-I A	アーネスト・ヘミングウェイとマレーネ・ディートリッヒの往復書簡
2008-I A	東京女子大学の建物に関する研究
2008-I A	翻訳家へのインタビューのウェブ化—東京女子大学の卒業生に聞き、発信する— ☆奨励賞受賞
2008-I A	政策により自殺率は変えられるか
2008-I A	現代の女子学生の言葉遣いについて
2008-I B	東京女子大学卒業生の翻訳家へのインタビュー集 ☆奨励賞受賞
2008-II A	子ども達へ、哲学からのアプローチ —倫理教育への一試案—
2008-II A	日本文学における〈エロス〉と〈タナトス〉の在り方を探る
2008-II A	ヴェトナムにおける女性の社会進出を歴史的観点から探る
2008-II A	東京女子大学におけるフェアトレード普及促進に向けた実証研究
2008-II A	日本女性の美意識
2008-II A	国際関係学とは何か？
2009-I A	“ゆらぎ”が持つ可能性の探究 —若者よ“ゆらぎ”を愛せ—
2009-I A	本学図書館蔵『古今和歌集』の研究
2009-I A	米文学短編翻訳
2009-I A	YA（ヤング・アダルト）文学作品研究 —輝く女性のライフデザイン ☆奨励賞受賞
2009-I A	トレーニングによる身体の変化について
2009-IA・B	レイモンド建築にみられる室内空間の特性について
2009-II A	後世における文学・文字の受容
2009-II A	731 部隊
2009-II A	多文化共生社会における生活者としての外国人の現状を知る
2009-II A	言語政策の歴史と現状
2009-II A	東京女子大学におけるバリアフリーの現状
2009-II A	性差・関係性の違いによる言語コミュニケーションの諸相

交付年度	テーマ
2009-II A	少数民族～アイヌ民族の現在～

学会関係刊行物リスト

▼学会研究叢書（モノグラフ）

	著者	書名	発行／市販分発行	刊行年	備考
1	古川 久	欧米人の能楽研究	東京女子大学学会	1962	学会在庫なし
2	Tsune Shirai	Developmental and Methodological Study of the Problem of Transposition Behavior in Visual Discrimination Learning	東京女子大学学会	1963	あり
3	丸山キヨ子	源氏物語と白氏文集	東京女子大学学会	1964	なし
4	山根 幸夫	明代徭役制度の展開	東京女子大学学会	1966	なし
5	江口 裕子	エドガア・ポオ論考 —芥川龍之介とエドガア・ポオ—	東京女子大学学会	1968	あり
6	水谷 静夫	国語学五つの発見再発見	東京女子大学学会	1974	あり
7	小川 圭治	主体と超越	東京女子大学学会	1975	あり
8	米田 俊彦	近代日本中学校制度の確立 —法制・教育機能・支持基盤の形成—	東京大学出版会	1991	大学の刊行 助成による 出版
9	鳥居フミ子	傳承と藝能—古浄瑠璃世界の展開—	武蔵野書院	1993	
10	中山 眞彦	物語構造論 —『源氏物語』とそのフランス語訳について—	岩波書店	1995	
11	大久保喬樹	森羅変容—近代日本文学と自然—	小沢書店	1996	
12	鎌田とし子 編著	貧困と家族崩壊 —「ひとり暮らし裁判」の原告たち—	ミネルヴァ書房	1999	
13	有賀美和子	現代フェミニズム理論の地平 —ジェンダー関係・公正・差異—	新曜社	1999	
14	白石 喜彦	石川達三の戦争小説	翰林書房	2003	
15	加藤春恵子	福祉市民社会を創る —コミュニケーションからコミュニティへ—	新曜社	2004	
16	濱井 修	倫理的世界の探究—人間・社会・宗教—	東京大学出版会	2004	
17	水籐 真	棟札の研究	思文閣出版	2005	
18	竹内 健蔵	都市交通ネットワークの経済分析	有斐閣	2006	
19	松沢 哲成	天皇帝国の軌跡 —「お上」崇拜・拜外・排外の近代日本史—	れんが書房	2006	
20	森 一郎	死と誕生—ハイデガー・九鬼周造・アーレント—	東京大学出版会	2008	
21	平林 優子	源氏物語女性論—交錯する女たちの生き方—	笠間書院	2009	
22	中村 真人	仕事の再構築と労使関係 —世紀転換点の日本と精密機械企業—	御茶ノ水書房	2009	
23	田中美保子	Aspects of the Translation and Reception of British Children's Fantasy Literature in Postwar Japan: With Special Emphasis on <i>The Borrowers</i> and <i>Tom's Midnight Garden</i>	音羽書房鶴見書店	2009	

▼公開連続講演会記録集

講演会 年 度	担当部会／ 編・著者 (講演者)	書 名	発 行	刊行年
1992	史学 (東京女子大学学会 史学部会 編) 山内 昌之 色川 大吉 田中 宏 上野 格 内海 愛子	激動の世界史—ボーダーレス時代と諸民族	東京女子大学学会 史学部会	1995
1994	日本文学 (室伏 信助 編) 秋山 虔 鈴木日出男 中山 真彦 永井 和子 小林 茂美	いま、「源氏物語」をどう読むか	おうふう	1995
1995	社会学 養老 孟司 山極 寿一 原 ひろ子 大日向雅美 上野千鶴子	女と男のかんけい学—家族のゆらぎの中で—	学文社	1997
1998	心理学 浅見 定雄 西田 公昭 江川 紹子 紀藤 正樹	「カルト」と若者	ブレーン出版	2000
2001	健康・運動科学 (鳥越 成代 横澤喜久子編著) 鷺田 清一 長崎 浩 跡見 順子 星野 公夫	からだ教育—考えよう自分のからだ—	市村出版	2004

▼学生研究奨励費助成 刊行物

		誌 名	発 行	刊行年
編集	東京女子大学 史学科 民俗調査団	甲州秋山の民俗 —山梨県南都留郡秋山村寺下・尾崎—	東京女子大学 史学科 民俗調査団	1974
		富士東麓の民俗 —静岡県御殿場市上小林—		1975
		普賢堂の民俗 —宮城県栗原郡金成町普賢堂—		1976
		雄勝役内の民俗—秋田県雄勝郡雄勝町役内—		1977
		紀北四郷の民俗 —和歌山県伊都郡かつらぎ町平・大久保—		1985

		蔵持の民俗 —茨城県結城郡石下町蔵持・蔵持新田— 藤守の民俗—静岡県志田郡大井川町藤守— 水沢野田の民俗—三重県四日市市水沢野田町— 番沢の民俗—福島県西白河郡表郷村番沢— 平山の民俗—静岡県引佐郡三ヶ日町平山— 田野辺の民俗—栃木県芳賀郡市貝町田野辺— 伊賀黒田の民俗—三重県名張市黒田— 今井の民俗—愛知県犬山市今井— 柳沢の民俗—山梨県北巨摩郡武川村柳沢— 赤沢の民俗誌—新潟県中魚沼郡津南町赤沢— 角島の民俗誌—山口県豊浦郡豊北町角島— 大柳生の民俗誌—奈良県奈良市大柳生町— 上鴨川の民俗誌—兵庫県加東郡社町上鴨川— 左草の民俗誌—岩手県和賀郡湯田町左草— 美保関の民俗誌 —島根県八束郡美保関町美保関— 吐山の民俗誌—奈良県山辺郡都祁村吐山— 綾戸の民俗誌—滋賀県蒲生郡竜王町綾戸— 名柄の民俗誌—奈良県御所市名柄— 佐陀宮内の民俗誌 —島根県八束郡鹿島町佐陀宮内— 神島の民俗誌—三重県鳥羽市神島町—		1986 1987 1988 1989 1990 1992 1993 1995 1996 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2005
訳 監修	東京女子大学 ストキス翻訳の会 本合 陽	ストップ・キス (著者：ダイアナ・ソン)	新水社	2005
著者 監修	東京女子大学 現代文化学部 コミュニケーション学科 日吉ゼミ 4年生 日吉 昭彦	共に生きる —ダムに沈む町、川原湯温泉—	東京女子大学 現代文化学部 コミュニケーション学科 日吉ゼミ	2007
編集	オープンテーマ演習 田中美保子 ゼミ	Colorful Career・Colorful Life 東京女子大学卒業生の翻訳家に聞く	東京女子大学 田中美保子研究室	2009
著者	東京女子大学の建物に 関する研究会	レーモンド建築に見られる室内空間の特性 について	橋詰かすみ	2010

編集	オープンテーマ演習 2009年度 田中美保子ゼミ	Look through the Stained-glass ヤングアダルト文学研究 輝く女性のライフデザイン	東京女子大学 現代文化学部 言語文化学科 田中美保子研究室	2010
----	--------------------------------	---	--	------

* 学生研究奨励費 刊行助成以外の一般研究グループによる発行

▼部会刊行学術誌 (*学会刊行補助)

		誌 名	刊行主体	創刊年
		日本文学	東京女子大学学会 日本文学部会	1953
		英米文学評論	東京女子大学 英米文学研究会	1954
		史論	東京女子大学 史学研究室	1953

		経済と社会	東京女子大学 社会学会	1965
		心理学紀要	東京女子大学 心理学研究室	2005
		言語文化研究	東京女子大学 言語文化研究会	1992
		統計学研究	東京女子大学 数学研究室	1955 (1978 終刊)
		パンセ	東京女子大学 哲学研究室	1967 (1980 終刊)

▼東京女子大学学会誌

内容	執筆者	タイトル	発行	編集年
	斎藤 勇	茶菓また可なり	東京女子大学学会	1951
論叢	田所 義行	中国に於ける中央集権的封建国家と封建思想の成立に関して		
	加納 秀夫	「想像の自由」と「選択」について		
	渡辺 正雄	科学史研究の意義		
	井上 秀子	私の先生と「チップス」先生		
	玉川 直重	古典語の学習について		
随筆	天達 文子	大江山の申し子 —宗教についての母と私の考え方—		
アメリカ 紀行	佐上 祐子	アメリカ留学生記		
	内海千江子	米国の体育視察より帰って		
講演録	Robert Schinzinger	Lebensphilosophie bei Goethe und Nietzsche		

▼単行小冊子

内容	執筆者	タイトル	発行	編集年
講演 要旨	A. K. Reischauer	Tokyo Joshidaigaku (Tokyo Woman's Christian College), It's Founding and Early Developments	東京女子大学学会	1955
講演 要旨	E. Brunner	Christianity and Culture (斎藤勇博士記念学術講演)		1955
講演 要旨	土居 光知	万葉集第七, 十一, 十二, 十三巻の編集年代と各巻の特質 (斎藤勇博士記念学術講演)		1955

▼東京女子大学創立五十周年記念論文集

	執筆者	論文タイトル	発行	編集年
哲 学 編		—現代における人間の問題—	東京女子大学学会	1968
	木村健二郎	序		
	宮本武之助	人間と宗教—宗教哲学の立場から—		
	青木 茂	個体と超越—M・ハイデッガーにおける「事実性」の分析を手引きとして—		
	小川 圭治	神の存在の対象性—研究ノート—		
	宮本信之助	新訳聖書における新しい人—エペソ書を中心として—		
川村 輝典	ヘブル書におけるイエスの人間像			

哲学編	木幡 瑞枝	ジャン＝パチスト・デュボスの美学 — 芸術作品の部 —		
	松川 成夫	中世における大学と教会		
	青木 茂 小川 圭治	あとがき		
日本文学編		— 日本文学・語学論集		1968
	木村健二郎	序		
	松村 緑	熊田精華とそのソネット — 「仿西小韻」 —		
	丸山キヨ子	源氏物語における仏教的要素 — 横川僧都消息の解釈について —		
	佐藤 勝	『不如帰』の位置 — 明治 30 年代の文学・その 2 —		
	森岡 健二	旧約聖書の訳語 — 漢訳聖書との関係を中心に —		
	進藤 咲子	「自由」小考		
	水谷 静夫	A Methodological Essay On Semantic Description Of Words		
英米文学編	松村 緑	後序		1968
	木村健二郎	序		
	C. Lee Colegrove	Shakespeare and Our Contemporaries		
	佐山栄太郎	ノースロップ・フライの『批評の解剖』 — 文学の原理と批評の理論の解明		
	渡辺美知夫	非合理の世界 — Maugham と Greene の対比 —		
佐藤 宏子	Edith Wharton に於ける経験の問題 — <i>The Reef</i> を中心にして —			
社会科学編	木村健二郎	序		1968
	古屋野正伍	南アジア大都市の社会構造		
	伊藤 善市	向都性向を規定する要因		
	山本 英治	現代地域と地域社会論		
	阿部とし子	「日本資本主義分析」と「労働力型」論の展開 — 社会学への接点をめぐって —		
	山手 茂	家族・家庭対策と家族社会学		
	栗原 福也	ネーデルラント連邦共和国の成立をめぐって		
	山根 幸夫	五四運動と蔡元培		
自然科学編	木村健二郎	序		1968
	玉虫 文一	化学親和力の概念 — その歴史的展開 —		
	松原 稔	A Note on Isometric Operators		
	遠藤 真二	Some Considerations on the Use of Complex Variables in Current Theoretical Physics		
	黒星 瑩一	On the Electromagnetic Structure of the Nucleon		
	福田 一郎・Leonard Wiley・Robert Ben Channell	A Comparative Study of <i>Trillium Ovatum</i> and <i>Trillium Rivale</i>		
	駒田 恭子	攀縁植物の回旋運動		
	鳥山 英雄	オジギソウ主葉枕の組織生理		
	矢沢 静江	ニンジンのカルの形態学的観察		

▼東京女子大学論集（学会機関誌）

1950年創刊、第1巻～第25巻	編集・発行：東京女子大学学会	CiNii ネット検索可能
1975年度（第26巻）～ 東京女子大学紀要論集	編集・発行：東京女子大学論集編集委員会 ／東京女子大学 * 2010年3月現在 第60巻まで刊行 * 年間概ね1号、2号、3号刊行 第18巻～3号は科学部門報告（Science Reports）	CiNii ネット検索可能
論集（第1巻～第50巻）総目録	編集・発行：東京女子大学学会／東京女子大学 * 2000年刊行	

▼東京女子大学学会ニュース（学会機関紙）

1975年創刊～2010年4.1現在169号まで刊行	編集・発行：東京女子大学学会	
----------------------------	----------------	--



学生研究奨励費 刊行物

学会年表

	年度	おもな学会事項	学会部会関係	大学関係関連事項 (大学ホームページより)
S25	1950	学会発会式、記念講演会（講師：小宮豊隆、赤松要、平野四郎） および部門研究会開催（1950.5.29） 学会講演会開催（以後随時） 学会機関誌として『論集』第1巻刊行（26巻以降は大学に刊行主体を移管）	各部会主催講演会 開催（以後随時）	文学部（英文学科、国文学科、哲学科）に社会科学科増設、短期大学部併設（英語科、国語科、数理科、体育科）
S26	1951	第1回始業講演開催 前期・後期（以後毎年度実施 後期は70年度まで） 学会『会誌』1号刊行（1951.12.20）（1号のみの刊行に終わる）		
S27	1952			旧制東京女子大学廃止
S28	1953	学会賞創設（卒業論文対象、1953年度予算から1966まで） 『論集』4-1 東京女子大学創立35周年記念号刊行（1953.12）	『日本文学』 (1953.7) 『史論』(1953.11) 『英米文学評論』 (1954.3) 創刊	
S29	1954	第1回公開講座開催	『統計学研究』 (1955.3) 創刊（24号1978.3最終刊）	文学部心理学科増設、短期大学部数理科を3年に。
S30	1955	公開学術講演会開催（3回以後随時開催） 学会フォーラム（合同談話会）開催（2回） 第1回学会コロキウム開催（教職員相互の合同研究発表会以後1962までに計15回開催） 小冊子3種刊行（講演要旨：ライシャワー、ブルナー、土居光知）		
S32	1957	高木貞二学長の学士院会員祝賀会開催（親和会と共催1958.3）		
S33	1958	学会主催東京女子大学創立40周年記念学術講演会開催（1958.9） 講師：白井常、片岡美智、三笠宮崇仁） 『論集』9-1 東京女子大学創立40周年記念号刊行（1958.12） 学会シンポジウム開催		
S36	1961	第1回連続講演会開催（共通テーマの下に公開で開催 以後毎年度の開催）		文理学部発足（哲学科、日本文学科、英米文学科、史学科、社会学科、心理学科、数理学科）、短期大学部は英語科を残し、他の3科は募集中止
S37	1962	学会研究叢書 No. 1 刊行（1962.12）（1975までに計7冊刊行）		短期大学部国語科・体育科廃止（1962.3）
S38	1963			短期大学部数理科廃止（1963.3）
S39	1964	『論集』15-2 科学方法論特集号刊行（1965.3）		文学部廃止（1964.3）
S40	1965		『経済と社会』 (1965.10) 創刊	
S41	1966	学会賞の廃止（予算は1966年度まで） 牟礼校地講演会開催（4回）		短期大学部を牟礼に移転、英語科、教養科の2科制とする。
S42	1967	『論集』科学部門を分冊、3号 Science Reports（科学部門報告）とする（18巻以降） 牟礼校地 第1回始業講演（以後1996年度まで 前期のみ） 牟礼校地 第1回連続講演会（以後概ね毎年度公開で開催1994年度まで）	『パンセ』(1967.7) 創刊（4号1980最終刊）	
S43	1968	学会主催東京女子大学創立50周年記念学術講演会開催（1968.10） 於善福寺校地 講師：鶴飼信成、古田富三） 『東京女子大学創立50周年記念論文集』6冊刊行 哲学編、日本文学編、英米文学編、社会科学編、心理学編、自然科学編（1968.10）		

	年度	おもな学会事項	学会部会関係	大学関係関連事項 (大学ホームページより)
S46	1971	後期始業講演を廃止		大学院文学研究科修士課程(日本文学専攻、英米文学専攻)、理学研究科(数学専攻)新設
S48	1973	第1回学生研究奨励費募集・交付(以後毎年度春秋2回)		
S49	1974	臨時総会にて『論集』の発行主体を1975年度(26巻)から大学に移管することを決定(1975.2)		
S50	1975	機関紙『学会ニュース』創刊		大学院文学研究科修士課程に(哲学専攻)を増設
S51	1976			大学院文学研究科修士課程に(史学専攻)を増設
S55	1980	〈参考『論集』1～30巻総目録刊行(1981.3) (1巻～25巻が学会機関誌)〉		
S59	1984	学生研究奨励費をA.一般研究とB.刊行補助とに分ける、第1回学生研究奨励費成果発表会開催		
		学会ニュースに活動報告号を創刊(No.41～)		
S63	1988			卒礼に現代文化学部(コミュニケーション学科、地域文化学科、言語文化学科)新設
H2	1990	学会ニュースに学生研究奨励費成果報告号を創刊(No.68～)		
H3	1991	学会研究叢書No.8刊行(1991.12 大学による刊行助成として再開)	『言語文化研究』 (1992.3) 創刊	短期大学部廃止 (1992.1)
H5	1993			大学院現代文化研究科修士課程(現代文化専攻)新設、大学院文学研究科修士課程に(社会学専攻、心理学専攻)を増設
H6	1994	院生の研究・活動補助費新設(1994年度予算から)		
		連続講演会記録集刊行(1995.3)(以後断続的に2004.3までに計5冊刊行)		
H9	1997			現代文化学部、大学院現代文化研究科を善福寺校地に移転
H12	2000	学会創立50周年記念講演会開催(2000.12 講師:康仁徳)		
		〈参考『論集』1～50巻総目録刊行(2000.3) (1巻～25巻が学会機関誌)〉		
H14	2002	第1回学術交流会開催(以後毎年度開催)		
H16	2004		『心理学紀要』 (2005.3) 創刊	大学院人間科学研究科博士後期課程(人間文化科学専攻、生涯人間科学専攻)設置、大学院理学研究科数学専攻を博士課程に課程変更し、博士後期課程を設置
H18	2006	第1回学生研究奨励費優秀グループ始業時研究発表(於講堂)		
		学会ニュースに卒業論文紹介号を創刊(No.147～)		
H19	2007	学会ニュースに学術交流会記録号を創刊(No.153～)		
H20	2008	第1回学生研究奨励賞授与(東京女子大学創立90周年を記念して大学が創設)始業時に表彰・研究発表(於講堂)		
H21	2009			現代教養学部新設(人文学科、国際社会学科、人間科学科、数理科学科)

東京女子大学学会 60年の歩み

2010年5月26日発行

編集・発行 東京女子大学学会
〒167-8585
東京都杉並区善福寺 2-6-1

印刷 株式会社 文 伸
〒181-0012
東京都三鷹市上連雀 1-12-17
電話 0422-60-2211

